

－鹿足地区中山間総合整備事業に伴なう発掘調査報告書－

萬世溢遺跡

2003年3月

島根県日原町教育委員会

—鹿足地区中山間総合整備事業に伴なう発掘調査報告書—

萬世塙遺跡

2003年3月

島根県日原町教育委員会

例　　言

1. 本書は、島根県益田農林振興センターの委託を受けて、日原町教育委員会が平成13年度に行った中山間地域総合整備事業に伴う、萬世溢遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は、島根県教育委員会文化財課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査指導	島根県教育委員会文化財課	椿　真治
	山口大学人文学部教授	中村 友博
	元島根大学法文学部教授	田中 義昭
事務局	日原町教育委員会教育長	大庭 耕助（平成13年9月30日まで）
	〃	内谷 澄男（平成13年10月1日から）
	日原町教育委員会教育次長	小松 洋司
調査員	日原町教育委員会係長	中井 将胤
調査補助員	清水 克則　　椋木 智史	
調査参加者	山田 賴之　　大庭 学　　大井 将正　　大庭 和雄　　河良 権二	
	久保 政幸　　若松 清重　　山本 牧美	

3. 発掘調査に際しては、益田農林振興センターをはじめ、島根県教育委員会文化財課に終始多大な協力をいただき、また山口大学人文学部の中村友博教授や元島根大学法文学部教授の田中義昭氏からも一方ならぬお世話をいたいたことに対し、ここに合わせて感謝の意を表したい。

また、発掘現場においては、所有者の吉崎フミヨ氏、小川和江氏、谷口静子氏、岸田晴明氏をはじめとし、地元の方々にご協力とご理解を得るなど、ここに無事発掘調査を終えることができたことに対してお礼を申し上げたい。

4. 今回の調査において、柱穴状遺構-P、土坑-SK、なお、現場あるいは編集に利用した現地地図は、日原土地改良区の協力を得た1/1000の縮尺のものであり、また位置図などは1/25,000を使用した。現地における地形測量は、株式会社ワールドの協力を得て行った。

なお、編集にあたっては、山田頼之・清水克則・椋木智史氏らが携わり、出土遺物の作図・トレースはいなか舎に委託した、石器については熊谷雅美（大田市教育委員会嘱託）さんに実測・トレース・原稿執等をお願いした。その他の作図・トレースは中井将胤が各担当し、編集は中井将胤が行った。なお、縄文土器については、柳浦俊一（島根県埋文センター）氏から全面的な教示を得ている。

目 次

第1章 発掘調査の経緯と経過.....	1
第1節 発掘調査の経緯.....	1
第2節 発掘調査の経過.....	1
第2章 地理的環境と歴史的環境.....	2
第1節 地理的環境.....	2
第2節 歴史的環境.....	2
第3章 調査の概要.....	4
第1節 遺跡の地形的立地.....	4
第2節 調査区の設定.....	4
第3節 層序と層位.....	6
1. A区の層序状況	6
2. B区の層序状況	8
第4節 遺構.....	10
1. はじめに.....	10
2. 検出遺構.....	10
第4章 出土遺物.....	13
第1節 はじめに.....	13
第2節 出土遺物.....	13
1. 縄文土器.....	13
2. 弥生土器.....	24
3. 須恵器・土師質土器・陶磁器類.....	25
4. 土錘.....	25
5. 石器類.....	29
第5章 遺跡内における花粉分析と自然科学分析.....	35
第1節 はじめに.....	35
第2節 分析結果.....	36
第6章 小結.....	45
第7章 平成14年度 確認調査.....	47

挿図・図表目次

第1図	位置図	2
第2図	位置と周辺の遺跡分布図	3
第3図	地形断面図	4
第4図	調査区配置図（1）	5
第5図	A調査区地区名図	6
第6図	A調査区土層図	7
第7図	B調査区土層図	8
第8図	A区遺構指示図	9
第9図	柱穴状遺構断面図	10
第10図	SK01配石遺構図	11
第11図	SK02配石遺構図	12
第12図	A調査区遺物分布図	15～16
第13図	B調査区遺物分布図	17～18
第14図	土器実測図（1）	19
第15図	土器実測図（2）	20
第16図	土器実測図（3）	21
第17図	土器実測図（4）	26
第18図	土器実測図（5）	27
第19図	石器類実測図（1）	31
第20図	石器類実測図（2）	32
第21図	石器類実測図（3）	33
第22図	調査区配置図（平成14年度）	47
第23図	I 調査区土層図	48
第24図	出土遺物実測図（平成14年度）	49
第1表	出土遺物観察表（縄文土器1）	22
第2表	出土遺物観察表（縄文土器2）	23
第3表	出土遺物観察表（弥生土器）	24
第4表	出土遺物観察表（その他）	28
第5表	出土遺物観察表（石器類）	34
第6表	出土遺物観察表（平成14年度）	48

図版目次

図版1	1 調査地点鳥瞰	2 北東からみた遺跡の全景
	3 南西からみた遺跡の近景	
図版2	1 A-I調査区北壁	2 A-I調査区西壁
	3 A-II調査区南壁	
図版3	1 P01の半截状況	2 P02の半截状況
	3 P03の半截状況	4 P05の半截状況
	5 P06の半截状況	6 P08の半截状況
図版4	1 SK01の検出状況	2 SK01の半截状況
	3 SK01の完掘状況	
図版5	1 SK02の検出状況	2 SK02の半截状況
	3 SK02の完掘状況	
図版6	1 縄文土器の出土状況	2 弥生土器の出土状況
	3 須恵器の出土状況	4 石器の出土状況
	5 石器の出土状況	6 石器の出土状況
図版7	1 A調査区の完掘状況	2 A-I調査風景
	3 A-II調査風景	
図版8	1 B調査区の完掘状況	2 B-I調査区完掘状況
	3 B-II調査区完掘状況	
図版9	1 縄文土器	2 縄文土器
	3 縄文土器	4 縄文土器
図版10	1 縄文土器	2 縄文土器
	3 縄文土器	4 縄文土器
図版11	1 弥生土器	2 弥生土器
	3 弥生土器	4 弥生土器
図版12	1 須恵器	2 その他の土器
	3 その他の土器	4 土錐
図版13	1 石器類	2 石器類
	3 石器類	4 石器類
図版14	1 平成14年度調査地点の近景	2 I調査区南壁
	3 I調査区完掘状況	
図版15	1 土器類(14年度)	2 土器・石器類(14年度)

第1章 発掘調査の経緯と経過

第1節 発掘調査の経緯

島根県鹿足郡日原町大字枕瀬の木ノ口地区に所在する本遺跡は、平成12年度に実施された中山間総合整備事業に伴う試掘調査でその所在が明らかになったものである。試掘調査は、平成12年10月19日から同年11月20日まで実施し、10箇所のうち3地点で遺物が確認され、その地点の地名が萬世溢（よろぜえき）と呼称されていることから萬世溢遺跡と命名した。

試掘調査では、第3層の茶褐色土・第4層の灰褐色土から、中世期の陶磁器片や青磁片などが10数点出土し、第5層の黒褐色砂質土からは、縄文時代晚期から弥生時代の土器片が数十点出土した。また、僅かではあるが石器類も出土した。

しかし、遺構等は確認することが出来ず、試掘調査という狭い調査範囲からでは遺跡の性格を明らかにすることはできなかった。

第2節 発掘調査の経過

上記のとおり、本地点が遺跡であるということが確認されたので、平成13年度に本調査を実施することにした。

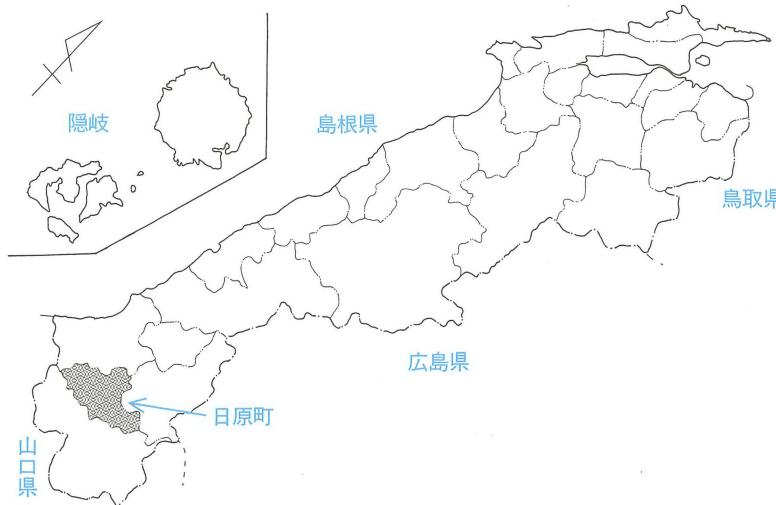
まず平成13年8月1日付で、島根県教育委員会宛に埋蔵文化財発掘調査の書類を提出し、調査は同年9月17日から行った。10月26日には、島根県教育委員会文化財課の椿真治文化財保護主事が発掘調査指導に来町された。調査中には、元島根大学法文学部教授の田中義昭氏が11月27日に来跡され、今後の調査方法や、遺構や出土遺物についての指導を受けた。また12月10日に、山口大学人文学部の中村友博教授と匹見町教育委員会の渡辺友千代氏が来跡され、特に縄文時代の遺構や出土遺物についての指導を受けた。さらに、遺構内の花粉分析と必要な自然科学分析を依頼し、12月11日に文化財調査コンサルタント(株)の渡邊正巳氏が来跡され、資料採取と調査を行われた。

なお、現地調査は同年12月14日に無事終えたのであった。

第2章 地理的環境と歴史的環境

第1節 地理的環境

本遺跡が所在する日原町は、島根県の西端に位置（第1図）し、津和野町・六日市町・柿の木村・匹見町・益田市の5市町村に隣接した山間地域に存在する。当町の最高地は、六日市・匹見町と稜線を分かつ標高1263mの安蔵時山々頂とし、最低地は町内を南北に貫流する高津川の明神淵（青原地内）の標高40m地点である。この高低差は1,233mあり、匹見町の1,246mに次ぐ県下第二位のものである。当町は東西17.2km、南北14.7km、周囲73.6kmを測り、総面積は167,72.におよぶが、その90%は山林で稻作を中心とした耕地は僅か2%に過ぎない。しかもこれらは山間に点在しているため、生産性の低い渓谷型農業地帯の形成を余儀なくされている。



第1図 位置図

め、その地名をもって命名した。

本遺跡は、日原町の南西部に当たる大字枕瀬地内に存在する。地理的特徴としては、吉賀川と津和野川の合流点付近に位置することである。吉賀川（全長57km）は高津川上流部の呼称であり、津和野川（37.3km）はその支流で、二河川は遺跡の500m下流で合流し、高津川と名を変えて益田市に向けて流下する。また、明治初期頃までの枕瀬地域は、二河川の合流点という地の利を活かして高津川舟運の河港として賑わったという。

本遺跡は島根県鹿足郡日原町大字枕瀬426番地外に在り、その地点を「萬世溢（よろぜえき）」と呼称されているた

（中井 将胤）

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺において、古代遺跡は確認されていないが、僅かに縄文・弥生土器や石器類が畠や田から採拾されている。これらは偶然の機会に得られたもので、正規の発掘調査を行ったわけではなく、いわば考古学的未開発地域であることは認めざるをえない（第2図）。

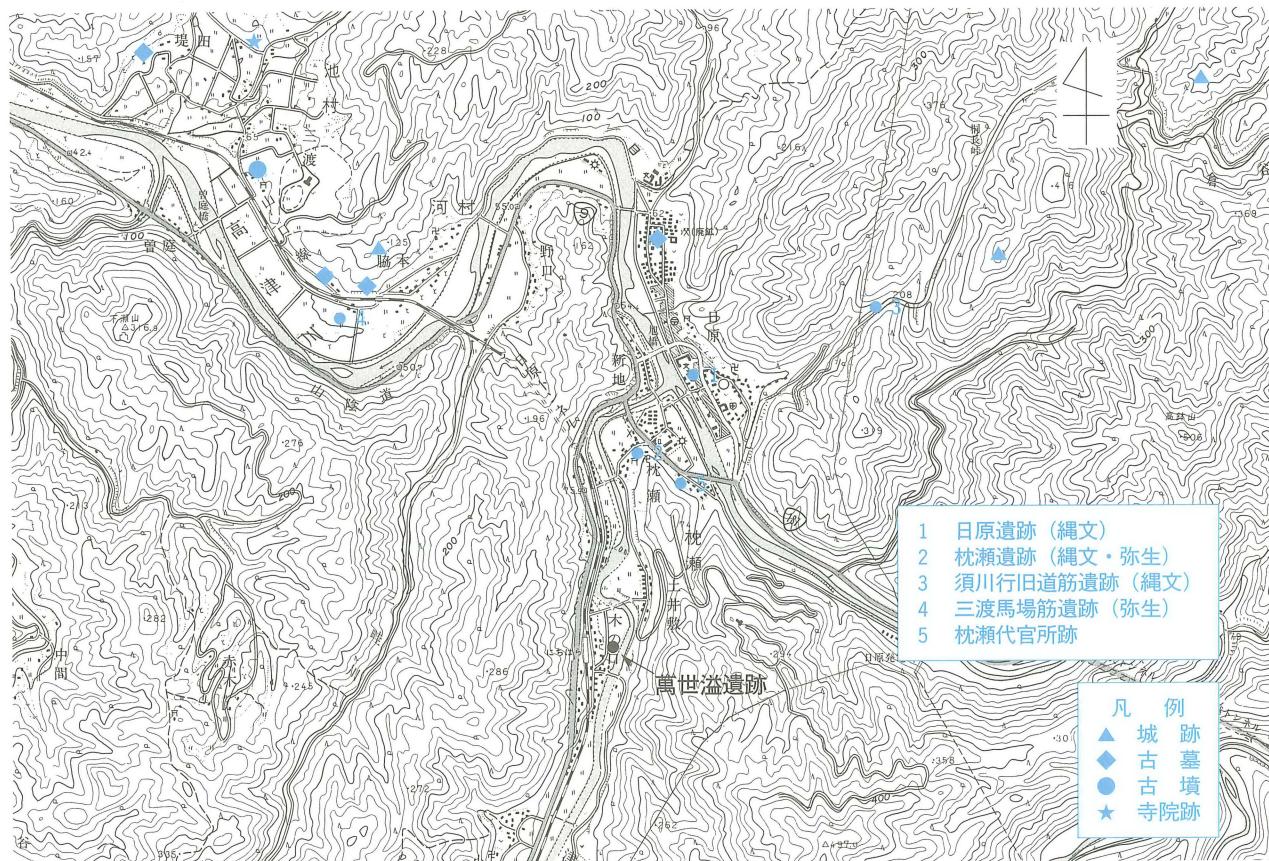
今のところ当地の史料的初見は、弘安5年（1283）、吉見頼行が能登国（石川県）から能濃郷木曾野（現津和野町）に入部し、吉見頼直の弟頼右が、北側の備えとして日原の下瀬山城を預けられ、その

後下瀬氏と姓をかえて279年間、下領（現日原町）の統治開発と防備に努めたとある。この時代は戦乱の時代であったが、この地方でも多くの戦があり、中でも天文22年（1553）10月から起こった天文の役が一番大きな戦で、山口県の陶氏と益田氏を敵にしたこの戦は、能濃郷一帯を戦乱の巣と化した。豊臣秀吉による朝鮮の役にも参戦している。

天文の役では吉見氏の津和野三本松城は包囲され、下瀬山城に陣替えをして難を逃れた。下瀬山城は天然の要害に護られた難攻不落の城で、本遺跡から僅か2kmの地点に位置することから、「天文の役」などの戦乱の渦中にさらされたことは間違いないであろう。また、立地的にも交通の要所であり、多くの人々が生活していたと考えられる。

近世になると、本遺跡周辺地域は津和野藩政の時代になる。本遺跡所在地枕瀬は、代官所が置かれて封建支配の中心地となっていた。また、対岸日原地区は幕府の直轄地天領となっていたため、支配的対立のまま明治期に至る。

（山田 賴之）



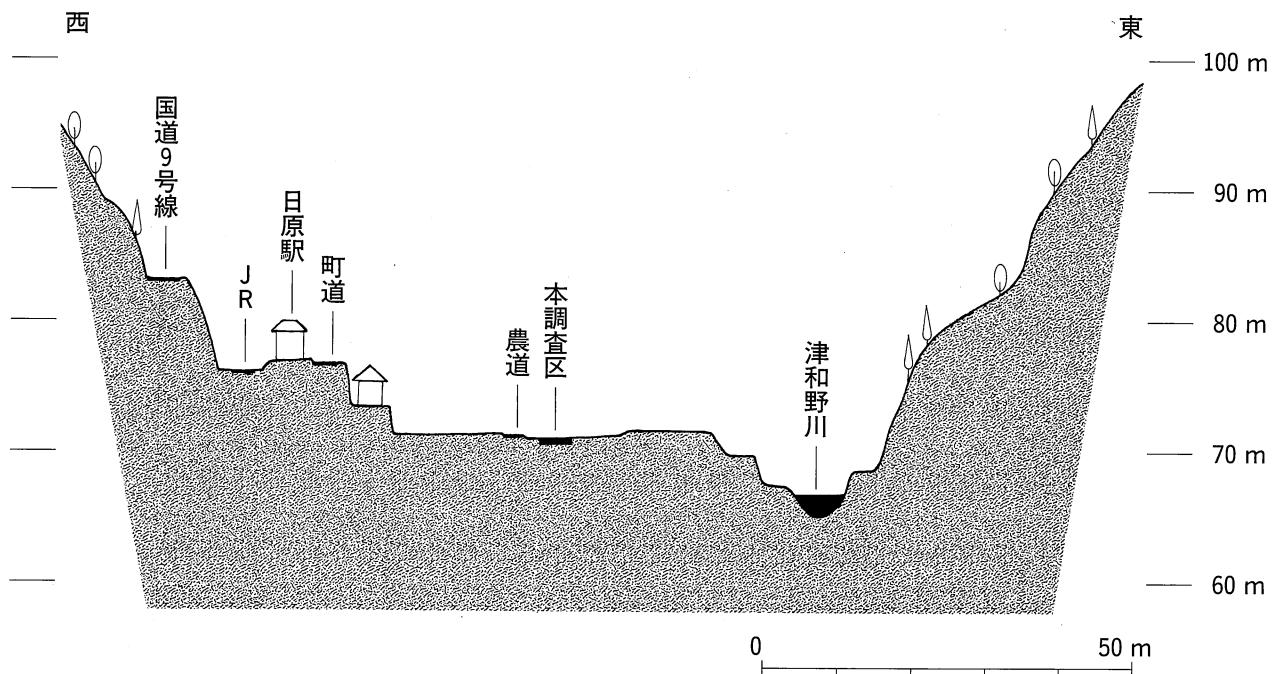
第2図 位置と周辺の遺跡分布図

第3章 調査の概要

第1節 遺跡の地形的立地

遺跡周辺の地形は、津和野川を境にして東側が山地地形を形成し、御殿打岳（497m）より南側の地倉山（620m）、そして青野火山群の主峰である青野山（907,6m）へと連なる。西側である津和野川左岸は、右岸とは対照的に400m以下の山々が連なっている。また、津和野断層に添うこの流域の流速は緩やかで、両岸の河岸段丘上には多くの集落や耕作地が点在する。

本遺跡は、津和野川が形成した河岸段丘の左岸に位置し、津和野川に近い水田耕作地に存在する。遺跡周辺には水田が拡がり、西側の山畔側には段丘を貫道する県道、JR山口線、国道9号線が走り、津和野川のもっとも下流付近で吉賀川との合流地点より僅か500m上流の標高70,7mを測る地点に立地する。（第3図・図版1）。

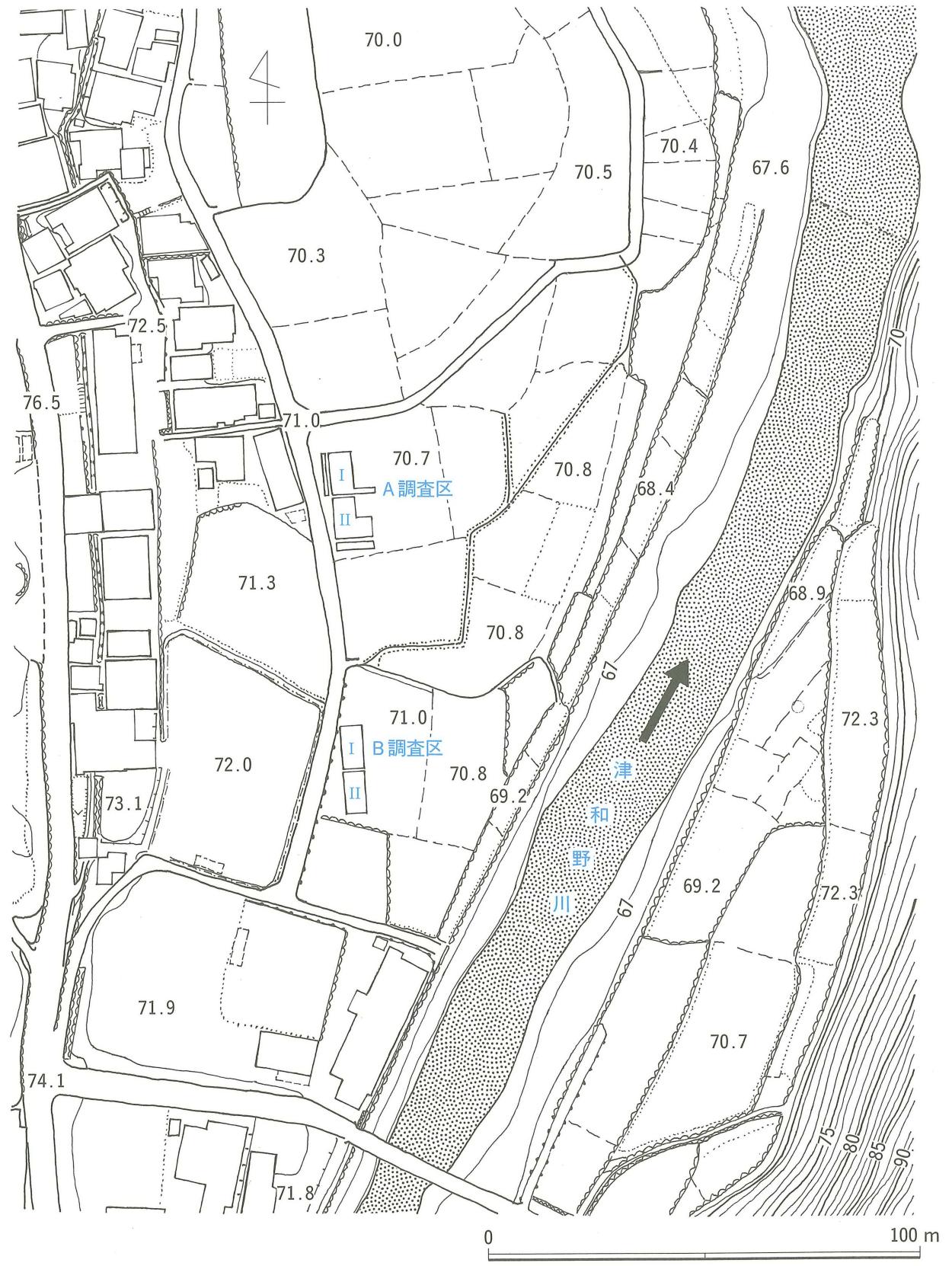


第3図 地形断面図

第2節 調査区の設定

平成12年度に実施した試掘調査では、津和野川から離れた農道沿いに試掘区を10箇所設けて調査を行った。このうち中央付近とに南端部の試掘区から陶磁器片や土器片などの遺物が出土したため、遺跡であることが判明したのであった。但し、その地点からは遺構等は確認されなかったが、試掘調査を受けた今回の本格調査区は、遺物が出土したこの2箇所を中心に設けることにした（第4図）。

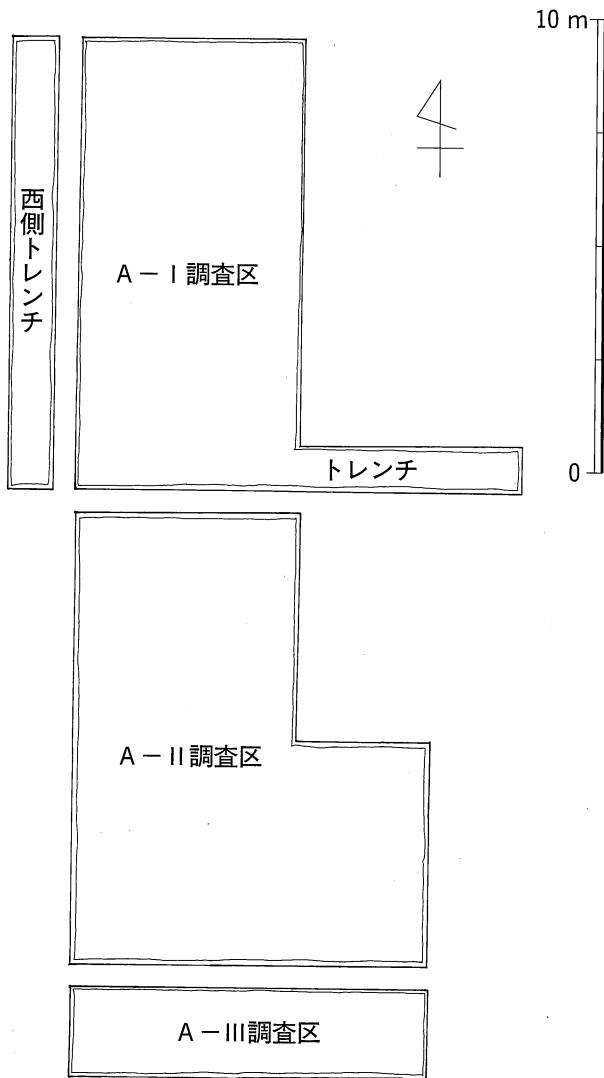
まず最初に、中央付近に設けた試掘調査地点を中心に $5\text{ m} \times 10\text{ m}$ の長方形区を設け、幅50cmを測るベルトを残し、さらに南北に $5\text{ m} \times 10\text{ m}$ の長方形区を設けた。調査面積は、合計 100 m^2 を測る。この区



第4図 調査区配置図

画の北側を本調査A-I区とし、南側をA-II区とした(第5図)。また、調査地域南端部に設けた試掘調査地点を中心に本調査区A-I・II区と同じ区形を設け、北側をB-I区、南側をB-II区とした。

その後、A-II区においては、3層まで掘り下げた段階で多くの出土遺物が確認されたため、調査区南側を5m×3mの範囲で拡張し、調査区を広げて包含層の東側への延長状況を追求した。さらに、本調査A区の中央で、A-I区の南壁沿いに東側方向に幅1m長さ5mのトレンチを設けた。なお本トレンチにおいては古い段丘基盤層が確認できるまで掘り下げることにした。また遺跡の広がりを捉えるため、A-II区南側に2m×5m、A-I区西側に1m×10mのトレンチを設け調査することにした(第5図)。



第3節 層序と層位

1. A区の層序状況

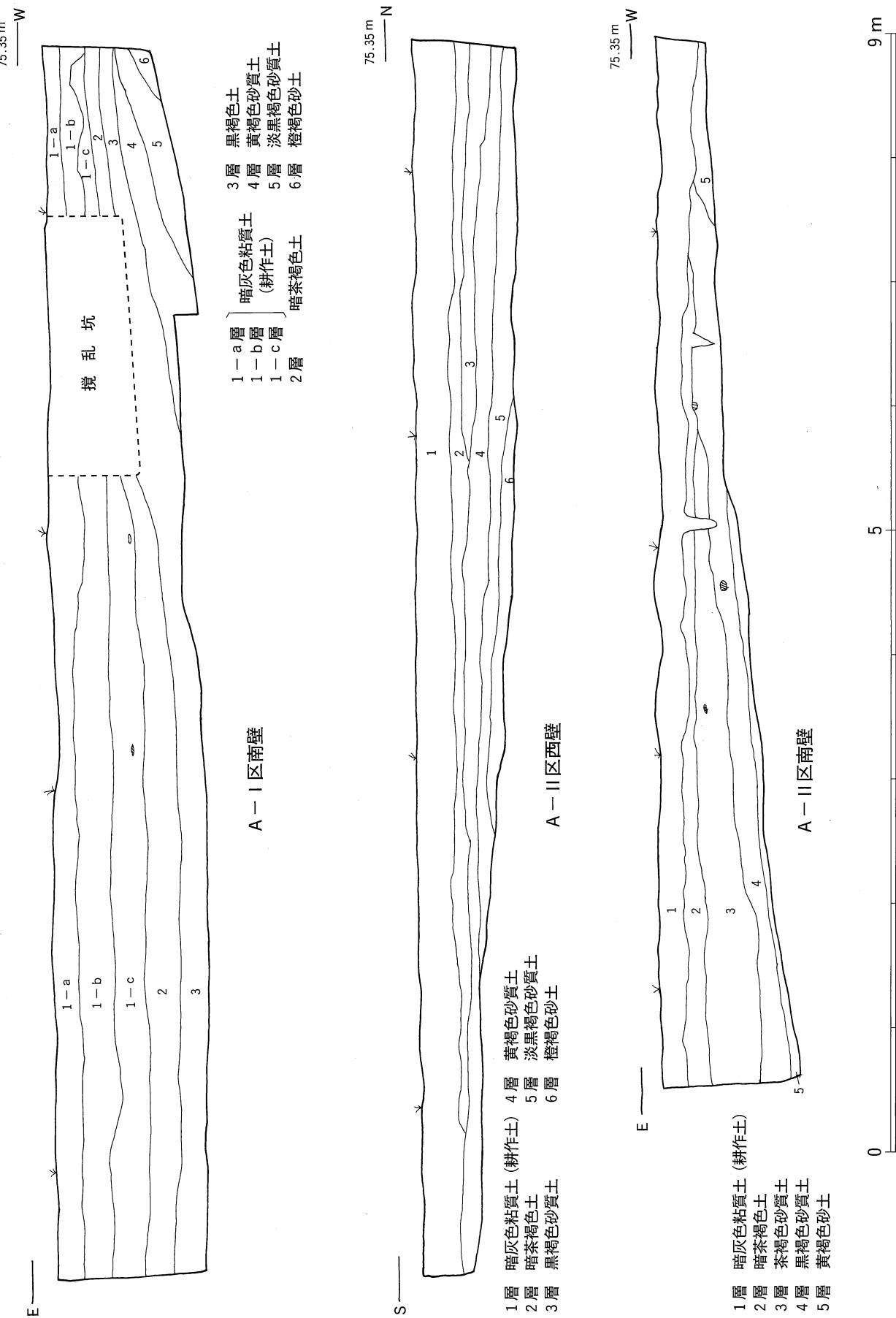
A区の基本層序は、上位から1層の暗灰色粘質土(耕作土)、2層の暗茶褐色土(1cm大の石を多く含む)、3層の黒褐色土、4層の黄褐色土、5層の淡黒褐色砂質土、6層の橙褐色砂質土の順で堆積していた(第6図・図版2)。これらを具体的にみていくと、以下のとおりであった。

第5図 A調査区地区名図

まず1層は、細分化すると3つの層に分層(1-a～1-c)できるのだが、暗灰色粘質土の水田耕作土として一つの層とした。層厚は凡そ35～40cmを測って、ほぼ平均に堆積する。そして2層は、マンガン・酸化鉄を含んでいて暗茶褐色を呈したものであった。土質は3層の黒褐色土に上層のマンガン酸化鉄分が含浸透して形成したものと考えられる。層厚は10cm前後で上流側のA-II区の南壁では、本層を確認することができなかった。

黒褐色を呈する3層は、有機質性土の堆積で形成された層と思われるもので、層厚は5～10cmを測り、南東半部では確認することができなかった。3層から以下の層は共通して言えることだが、東側の津和野川へ向けて傾斜した形で堆積している。2・3層においては、中世期の陶磁器類や土師質の土器片が多く出土している。また4層との境界付近からは弥生土器が僅かではあるが出土している。

4層の黄褐色砂質土は、調査区の西壁付近先端があり、東側の津和野川へ向けて層高が厚くなる。



第6図 A調査区土層図

おそらくこの層は河床に堆積した砂土であり、幾度かの洪水によって形成した層であると思われた。本層からは縄文・弥生土器が出土している。

5層は、淡黒褐色砂質土で上層の砂土が浸透して砂質化したものと思われる。層厚は15~20cmを測り、東側へ向かうほど低く傾斜しており、西壁から2m地点、深さ1,2mまで、それ以下については、開発工事による改変が行われないため、また、調査期間の問題も考慮して調査を行わず、今後に確認を託した。そのため本層の全貌を明らかにすることは出来なかった。出土遺物は多く、特に縄文後期から弥生前期にかけての土器片が確認されている。6層は、橙褐色砂土で4層と同様に河床に堆積した砂土であると思われた。

上述したことから、調査区内においては南西端が高く、北東に向けて低く傾斜する自然地形を成している。

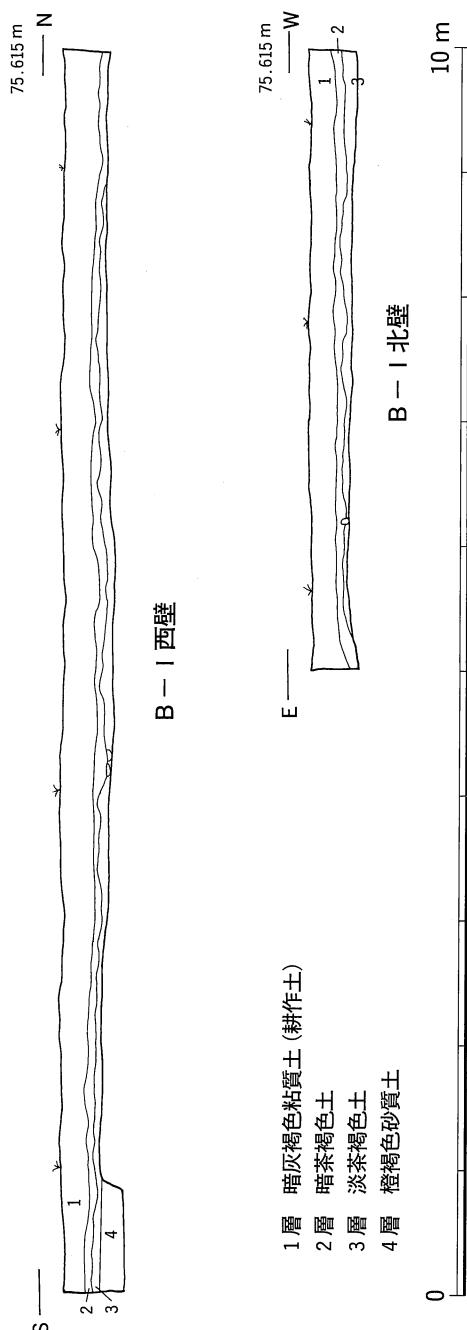
2. B区の層序状況

B区の基本層序は、上位から1層の暗灰褐色粘質土(耕作土)、2層の暗茶褐色土(1~3cm大の石を多く含む)、3層の淡茶褐色土、4層の橙褐色砂質土の順で堆積していた(第図7)以下、具体的に見てみる。

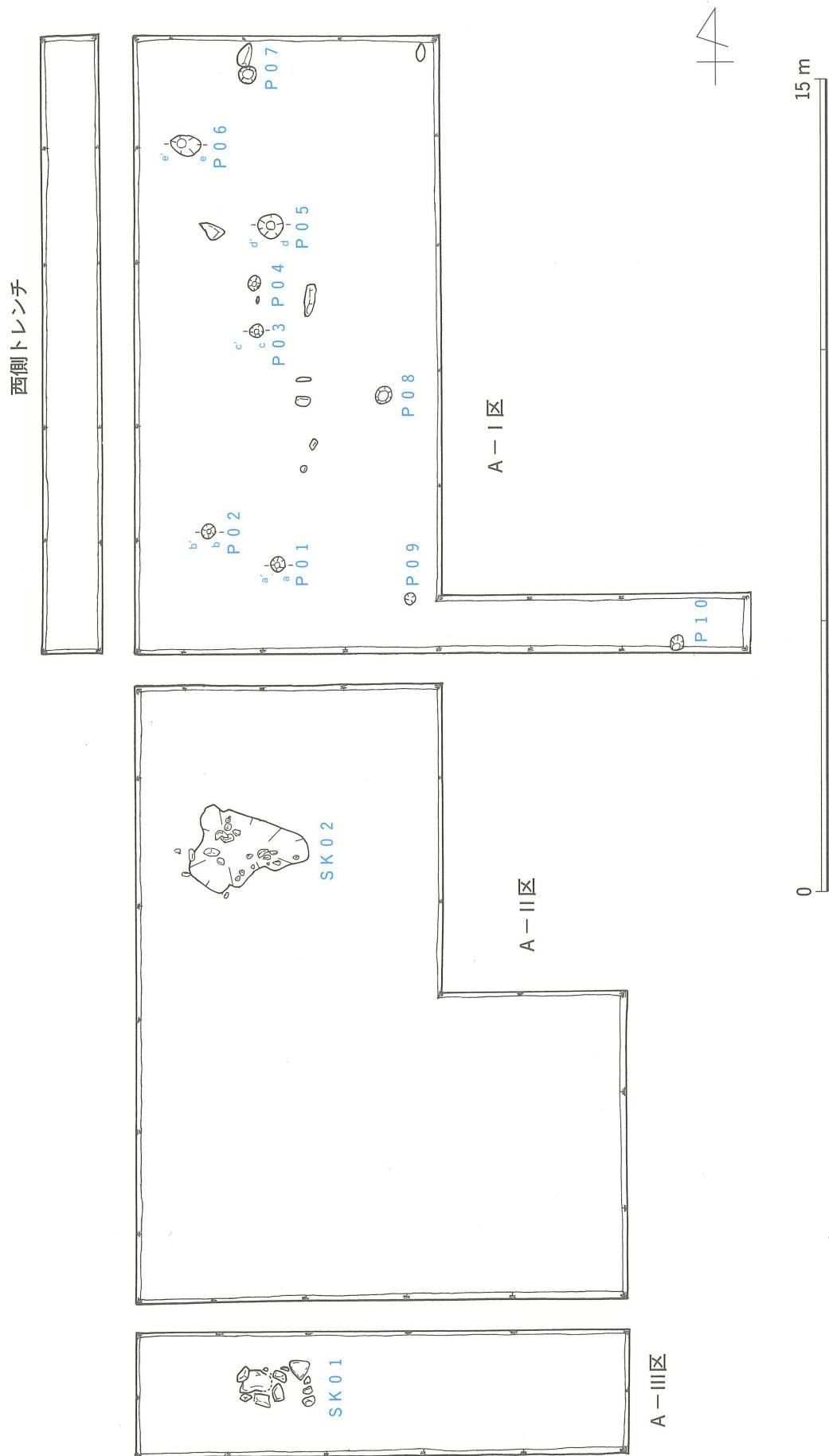
まず1層は、暗灰褐色粘質土の水田耕作土で、層厚は凡そ20~25cmを測ってほぼ平均的に堆積する。そして2層は、酸化鉄が透して暗茶褐色を呈し、1~3cm大の小石が多く堅い層になっており層厚は約5cmを測るが、土質的には下位層の3層と同じと捉えることができた。

3層は淡茶褐色土で層厚5cmを測り、ほぼ平均的に堆積する。本層の下部からは縄文・弥生と石器類・土器片が僅かではあるが出土した。しかし、遺構等は確認することは出来なかった。2、3層いずれも水田耕作のための床土であるとも考えられる。4層は橙褐色の砂質土で、過去の水害等により河床の砂土が堆積したと思われた。

以上、B区はA区に比べて高台に位置していたと思われた。そのため水田開発時に遺物包含層などは堀削されたと考えられた。しかし、A区においては、現在より自然地形は低く旧耕作土や遺物包含層などが比較的残っており、遺物も多く出土した。



第7図 B調査区土層図



第8図 A区遺構指示図

第4節 遺構

1. はじめに

本節で述べる遺構については、本調査B-I・II区では検出されていないので、ここで報告するものは全てA-I・II区におけるものである。また、これら検出された遺構について、その形状からピット状のものをP、配石遺構状のものをSKと略号することにした（第8図・図版3～5）。

2. 検出遺構

i. ピット

ピットと称した柱穴状のものは、A-I区3層上面から7穴（P01～07）検出され、6層上面からは3穴（P08～10）検出された（第9図・図版3）。これらのピットは、大きく分けて二つの時代のものと推定された。

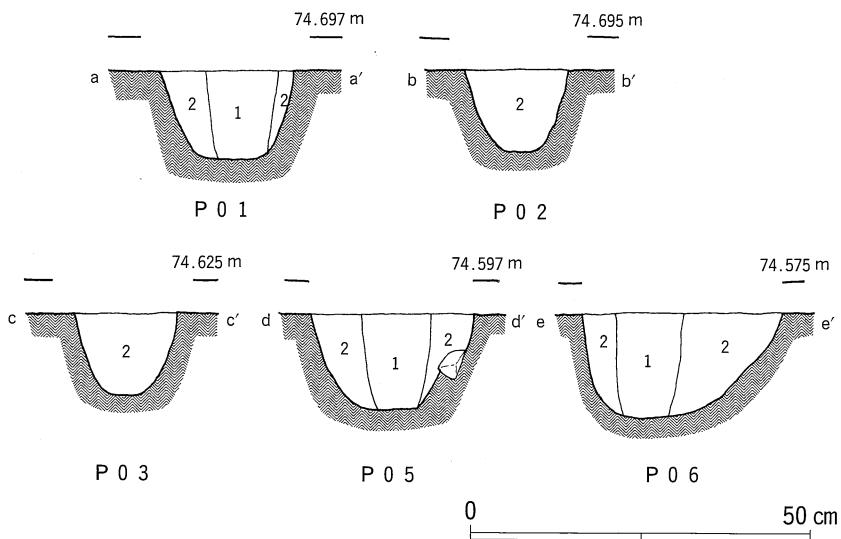
初めに3層上面に検出された遺構から説明することにする。P01は2層（暗茶褐色土）と3層（黒褐色土）の層界面において検出された。直径20cmを測るほぼ円形状で、深さ13cmを測り比較的に浅かった。その坑内の断面には、中心部に直径約10cmの筒状で灰褐色粘質土が嵌入し、その周辺に暗灰褐色土が嵌入していた。

P02・04・07は、直径15cmを測るほぼ円形状で、深さ約13cmを測り、暗灰褐色土が嵌入されていた。P05は、短径20cm、長径23cmを測り、深さ約15cmの楕円形を呈していた。その坑内には、P01同様に中心部に直径約10cmの筒状の灰褐色粘質土が嵌入し、その周辺に暗灰褐色土が囲繞していた。

P06は、短径22cm、長径30cmを測り、深さ約15cmを測る変則的な楕円形を呈している。その坑内には、中心より西側に直

径10cmの筒状の灰褐色
粘質土が嵌入し、その
周辺に暗灰褐色土がと
して埴っている。

以上、P01～07全て
の遺構において言える
ことであるが、埋土は
耕作土と考えられ、本
遺構群の深さが浅いこ
とから水田開墾時に掘
削され、遺構内に耕作
土が混入したと考えら
れる。また、遺構面上
層からは、遺物がほと
んど出土していないため遺構の年代は特定できないが、おそらく江戸時代以降の柱穴状遺構と考えら



第9図 柱穴状遺構断面図

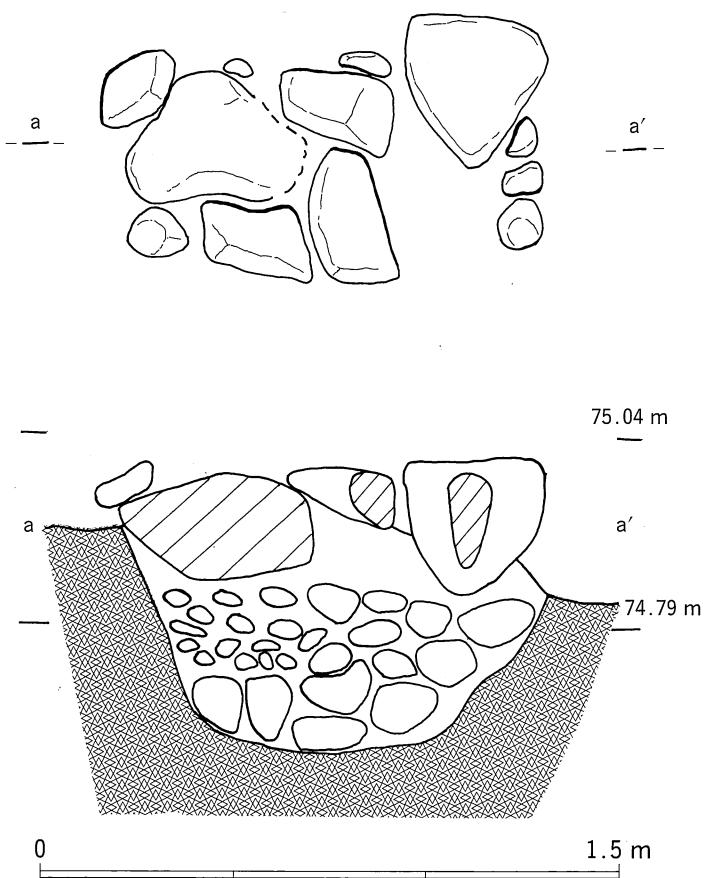
れた。

次に6層上面から検出された遺構について見てみる。P08は、直径約30cmを測り、深さは約10cmを測るほぼ円形状である。6層の黄褐色砂質土に淡黒褐色砂質土が嵌入している。P09は直径20cmを測り、深さ僅か5cmを測るほぼ円形状を呈している。P10は同様に淡黒褐色砂質土が嵌入している。P10は長径25cm、短径18cmを測る楕円形を呈している。深さは約26cmで他の遺構に比べて深く、P08、09同様に淡黒褐色砂質土が嵌入していた。

本層から確認された遺構は、おそらく柱穴状の遺構であるが、検出確認された数も少なく、これら3基の遺構の関連性は判断できなかった。

ii. 配石遺構

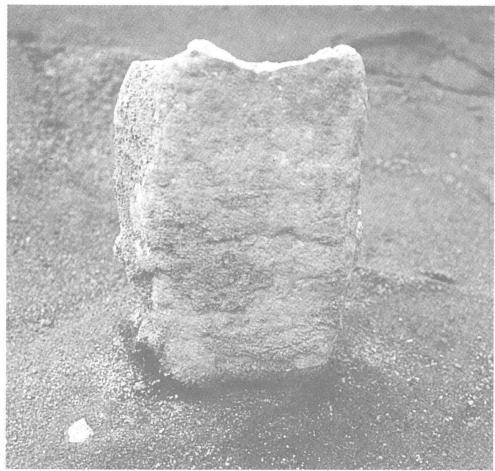
SK01と称した遺構は、A-II区南側に設けたトレンチにおいて検出された遺構である。本遺構は、標高74.79m地点で、砂層上に検出され、50cm×120cmを測る長方形を呈し、長径約40cm大の大きな川原石を用いた配石遺構である。坑の深さは約50cmを測り、坑内には拳大の川原石が多く埋積された状態になっていた。遺構内から検出された遺物は少なく、江戸時代のすり鉢や茶碗といった陶器片が出土している。また、僅かではあるが貝類の殻が見つかっている。これらの出土遺物から考えると江戸時代の墓ではないかと思われた（第10図・図版4）。



第10図 SK01配石遺構図

SK02と称した遺構は、2m×1.5mを測る異形な楕円形を呈しており、25~30cmを測る川原石が6

個、20cm以下の石が十数個、無秩序に配置され、複数の配石遺構が混在していると考えられたが、はつきり区別することは困難であった。そのため、一つの遺構として捉えることにして以下、記述することとした。



立石の表出状況

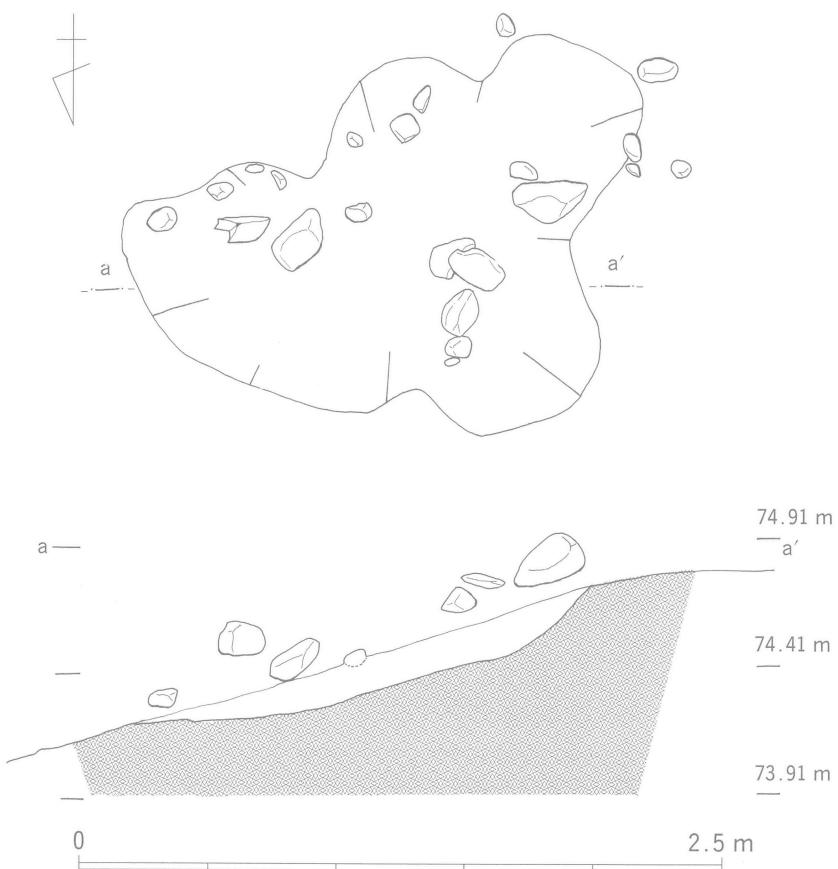
本遺構は、4・5層の境界層において確認され、西側の標高が74,73m、東側の標高は74,19mで東側が低く傾斜する。西側から中央部が深く20cmを測るが東側に向けて薄層になる。傾斜した地盤に遺構を造ったのか、あるいは津和野川の氾濫等の原因により東側部分が流された可能性もあると考えられる。

埋土は淡黒褐色土で、6層の橙褐色砂質土層中に掘られた形になっている。遺構内の土質については、第5章で記述しているので、ここでは詳しい説明は控えることにする。

出土遺物は多く出土し、上層からは弥生土器が多く、下方になるほど縄文土器が多く出土している。推定の域を越えないが、縄文時代後期頃の遺構であると考えられた。しかし、同時期の遺構が他では確認されないこともあって、具体的な用途については判らなかった（第11図・図版5）。

また、SK02遺構の2m南側に立石が1個確認された。しかし、人意的に置かれたものなのは分からなかった為、遺構としては取り扱わなかった。

(中井 将胤)



第11図 SK02配石遺構図

第4章 出土遺物

第1節 はじめに

調査A-I・IIにおいての出土遺物は、縄文器片583点、弥生土器片495点、須恵器片7点、陶磁器片49点、土師質土器片164点、石器類203点と多く出土した。次節で説明するように実測提示した遺物は出土層位、標高を捉えた上で採り上げたものである。

本調査B-I・II区における出土遺物については、縄文土器片15点、弥生土器片8点、石器類5点で、すべての遺物において調査区ごとに出土層位、また出土標高も捉えた上で採り上げた。

実測を行った出土遺物の内訳は、出土遺物集計表（第1～4表）に示しているとおりである。また、遺物の出土地点を第12・13図に示している。

本章では実測遺物を中心に以下、年代の古い順に詳細に記述していくことにする。

第2節 出土遺物

1. 縄文土器（第14～16図・図版6-1、9、10・第1・2表）

1～62が縄文土器である。これらの土器は後期中葉から晩期末葉までのものであった。このうち39が後期中葉でもっとも古く、A-II区5層から出土した深鉢の胴部中位片である。文様は粗く太いLRの縄文で下方をミガキで消している。胎土は1mm程度の砂粒と僅かな金雲母を含み、崎ヶ鼻式から沖丈式ではないかと思われる。

1～3は後期後葉でA-II区5層から出土したものである。いずれも浅鉢の口縁部片で、1は西本式か元住吉山I式の特徴をもつ。口縁部は内湾し、斜目の平坦面が見られる端部となる。口縁部と胴分との境は強く屈曲する。文様は上下2条の深い沈線の間に（磨消縄文）細い擬似縄文（ヘナタリ）を施し、のちナデている。2は西本式系で波状口縁の可能性もあると思われた。文様は沈線が5条以上あり、その間の三段を擬似縄文（ヘナタリ）で埋める。無文の沈線間はミガキ、のちナデる。3は口縁部が大きく外反しながら立ち上がり、外側の斜目に平坦面のみられる口縁端部へと続く。3mm程度の砂粒・金雲母を含み、にぶい褐色で三万田式の特徴が見られる。

11～16も後期後葉の浅鉢で、出土地点はA-II区から、13は3層、14・16が4層、15が5層から出土した。このうち13は精製浅鉢の口縁部で、屈曲部に擬似縄文（ヘナタリ）を施し凹線文系より古い西本式系統の特徴が見られる。14は鉢の胴部屈曲部直下の破片で、外側は2条の平行凹線を施し、縄文を施したのちミガキで消している。内側はヨコ方向の入念なミガキをし、のちにナデる。

24・25は後期後葉の土器で、いずれも西本式系の特徴が見られる。24は体部が外傾しながら立ち上がり口縁部は肥厚し、斜目上方に折れ曲がる。口縁部は擬似縄文を施し、内側はハケのちナデる。25は深鉢または浅鉢の口縁部で、大きく内湾している。外側は5条の沈線によって3段の帯状文様体を区切り、最上位帯は列点状の連続刻み、中位は磨り消しの無文、最下段は小粒のLRの擬似（巻貝）縄文を施す。

48は、体部中位から口縁部にかけての破片4つの破片を接合したもので、縄文後期から晩期の深鉢である。A-II区4層から5層上面にかけて出土したものである。形状は粗製の深鉢で口縁部は逆「八」字

状に開き、頸部は弓状に大きく湾曲し、胴中位が膨らんでいる。外側は口縁から胴部中位までヨコナデでし、太い条痕を残す。胴下部は板状工具によるナナメ方向のナデ。色調はにぶい黄橙色で2mm程度の砂粒を含む。

縄文晩期前葉の土器は4・5・18・26・34・36・47である。このうち5は、A-III区3層から出土した浅鉢の口縁部の破片で、体部が外反しながら立ち上がり、上方で肥厚し、平坦面をもつ口縁端部へと続く。外側はミガキ、内側は二枚貝条痕・プラス・ミガキで仕上げている。26はA-II区5層から出土した深鉢の口縁部の破片である。体部は外反しながら立ち上がり斜目に平坦面をもつ口縁部へと続く。外側はハケ・プラス・ナデ。のち2条の太い沈線を施す。端部頂面にも沈線が残る。内側はナデ。口縁端部下に1条の太い沈線がある。34は体部が外反気味に立ち上がり、平坦面をもつ口縁部へと続く。外側は二枚貝条痕のヨコナデ、内側はナデで仕上げる。色調はにぶい褐色で、2mm程度の砂粒と金雲母を含み、滋賀里II式に併行するものと思われる。47は粗製深鉢の胴部片で、外側はケズリ、内側は二枚貝条痕のヨコナデである。

6・35・37・38は晩期中葉の土器である。6は浅鉢でA-II区4層から出土している。口縁部は逆「八」字状に開き、丸みのある端部へと続く。外側は巻貝条痕、内側はナデ、2mm程度の砂粒、僅かに金雲母を含む。突帯文期直前（前池式併行）の口縁部破片である。37は凸帯文期直前の滋賀里III式に併行するものと思われる。

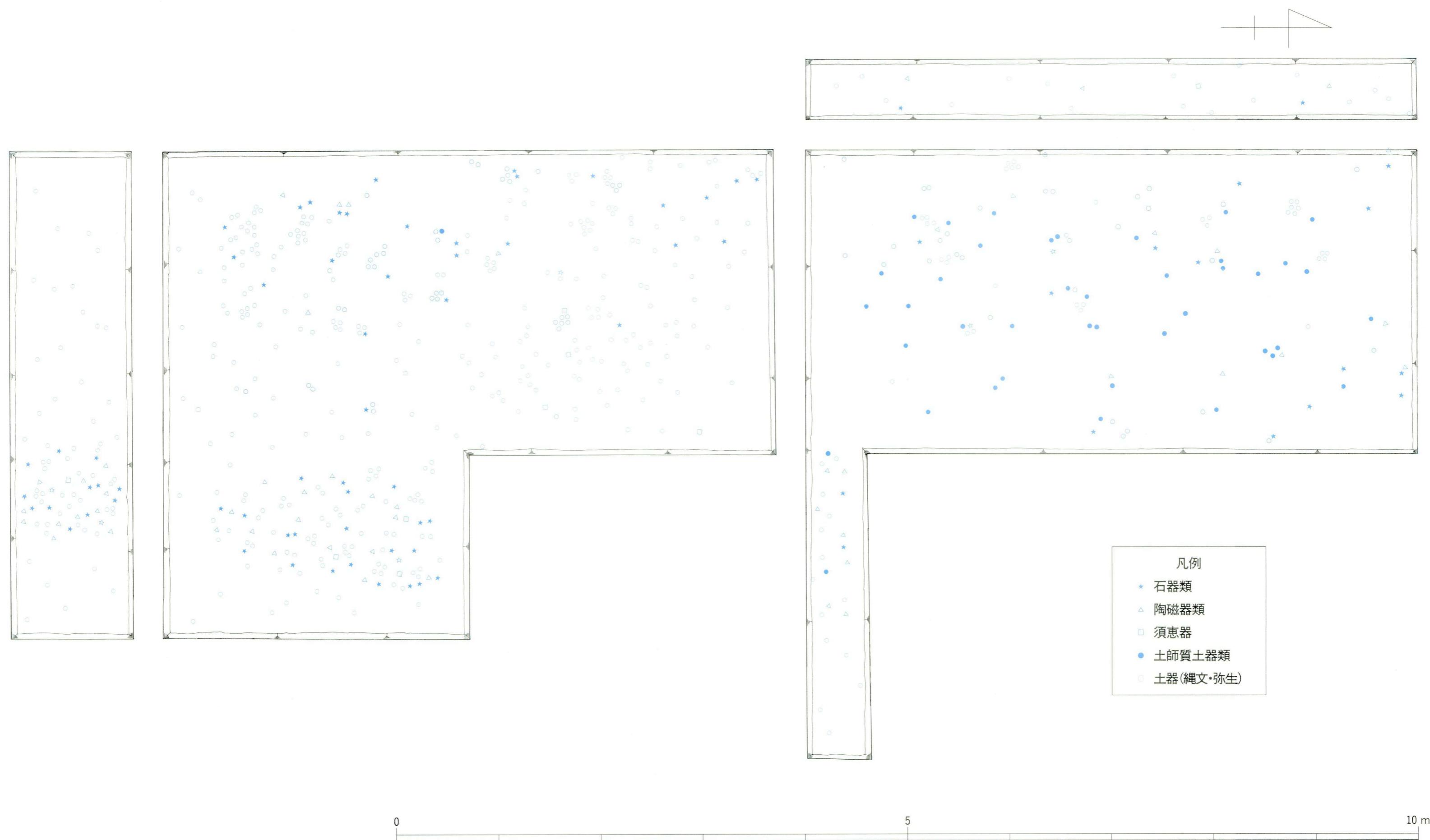
8～10・17・19～22は晩期後葉から末葉の土器片で、突帯文期に伴う浅鉢である。このうち9は口縁部が小さく内傾し、端部は尖り気味になる。頸部以下は逆「八」字状にすぼまる。17は体部片で、大きく外傾しながら立ち上がり、内面に浅く幅広のくぼみがある。外側はミガキ、焼成後にタテ方向に沈線を施し、内側はミガキ。20は浅鉢体部の破片で、僅かに外反する口頸部をもつ。屈折部はゆるく逆「八」字状をなす。外側はミガキのちにナデる。ヘラ状工具による痕があり、タテに長い三角形状の文様を沈線で画く。内側はミガキのちナデ。色調は、にぶい褐色で1mm程度の砂粒、僅かに金雲母を含む。中山B式に類似するものと思われる。

28・29は晩期後葉から末期の壺片と思われる。このうち28は体部上位～口縁部の破片で、晩期後葉から末期の突帯文期段階の土器と思われる。体部は外傾しながら立ち上がり、上部で外側に小さく折れ曲がり、平坦面をもつ口縁端部へと続く。外側はヨコ方向のミガキ、内側は風化して詳細不明。

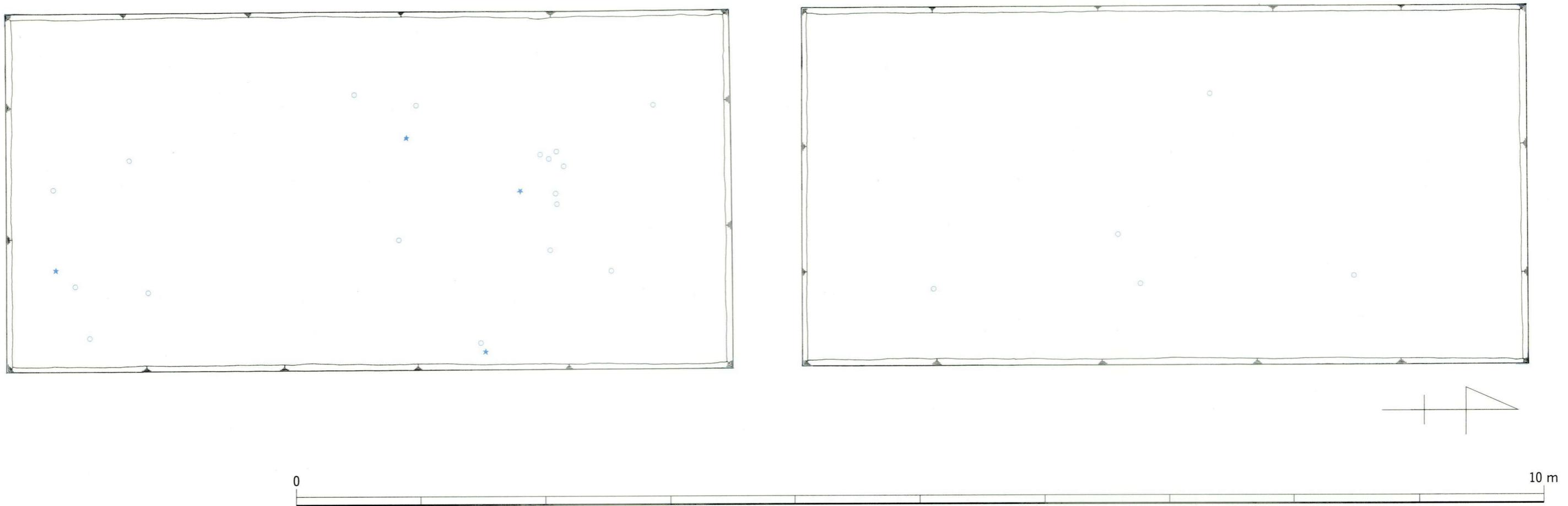
51～56は晩期後葉から末葉の土器片で、突帯文期に伴う深鉢である。このうち52は口縁部が僅かに外傾し、端部は薄くして丸みをもたせ、指圧痕が見られる。突帯上の核目はLR方向に沈線状に刻む。突帯の形状は台形で太く、高く、位置は口縁端部より少し下につく。この土器は弥生前期に近いものと思われる。54は口縁部が直立し、端部は丸みをもつ。突帯部は端部より下方に水平につき、D字型の刺突状の核目を施す。断面は幅広の扁平、刻みは押し引き状になる。また、端部直下に1条の沈線がある。55は口縁部の破片で、突帯は太く口縁端部に接する。刻目は太いD字型で尖り気味に下向きにつく。この土器は、2条突帯の胴部片の可能性もある。

上記に述べた以外の実測遺物については、いずれも縄文後期から晩期の土器片であることを確認している。後期前葉以前の土器は出土していない。

(中井 将胤)

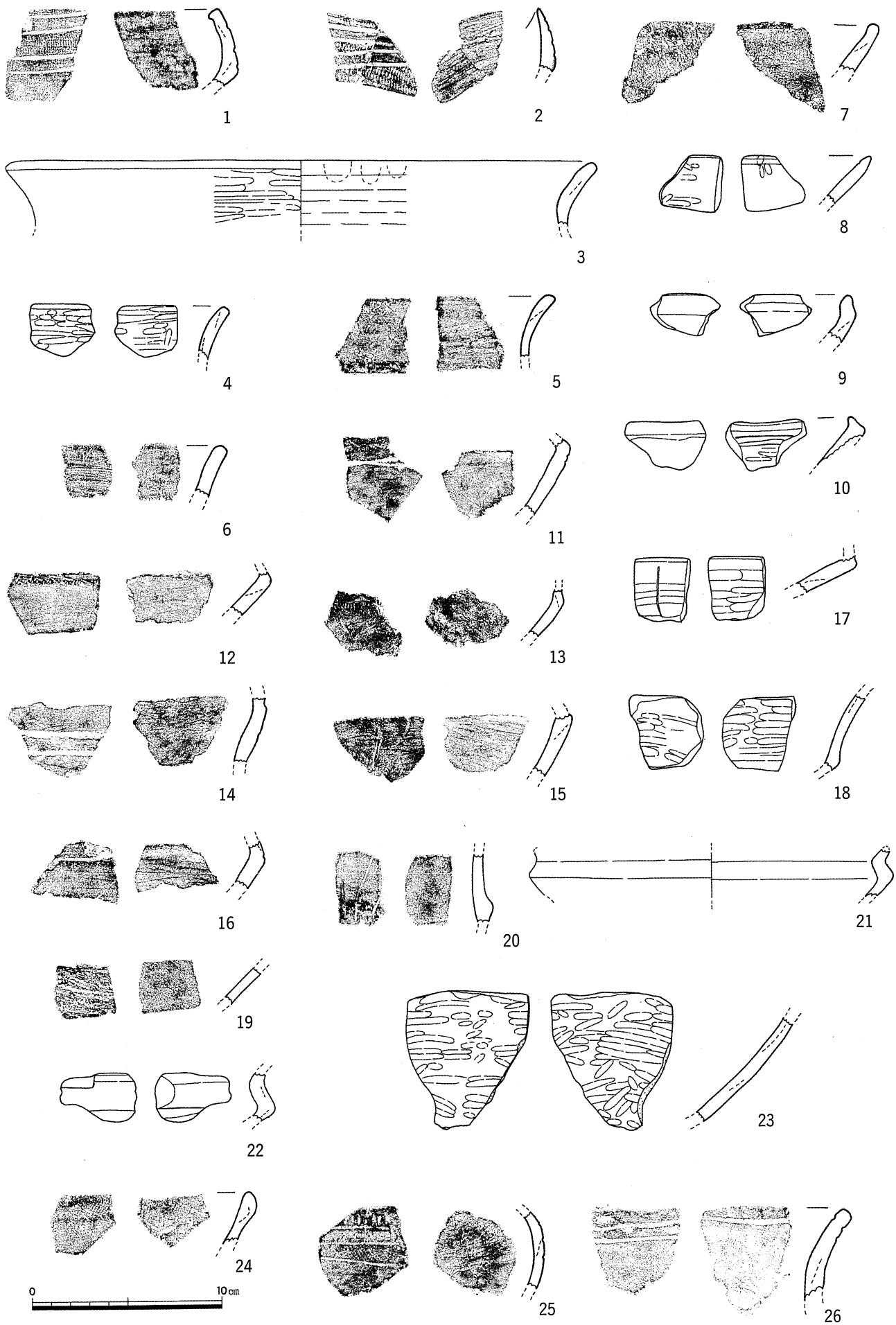


第12図 A調査区遺物分布図

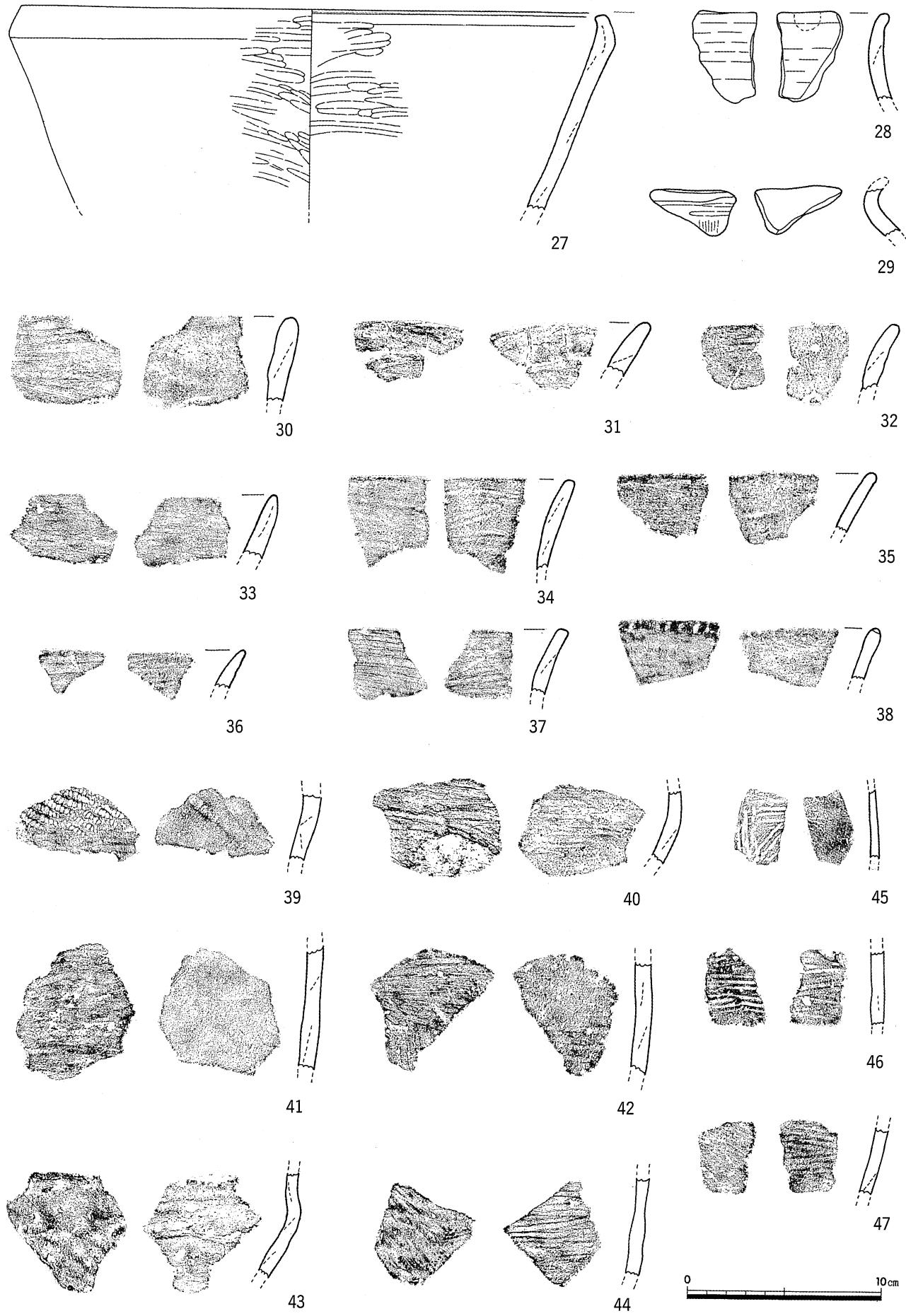


第13図 B調査区遺物分布図

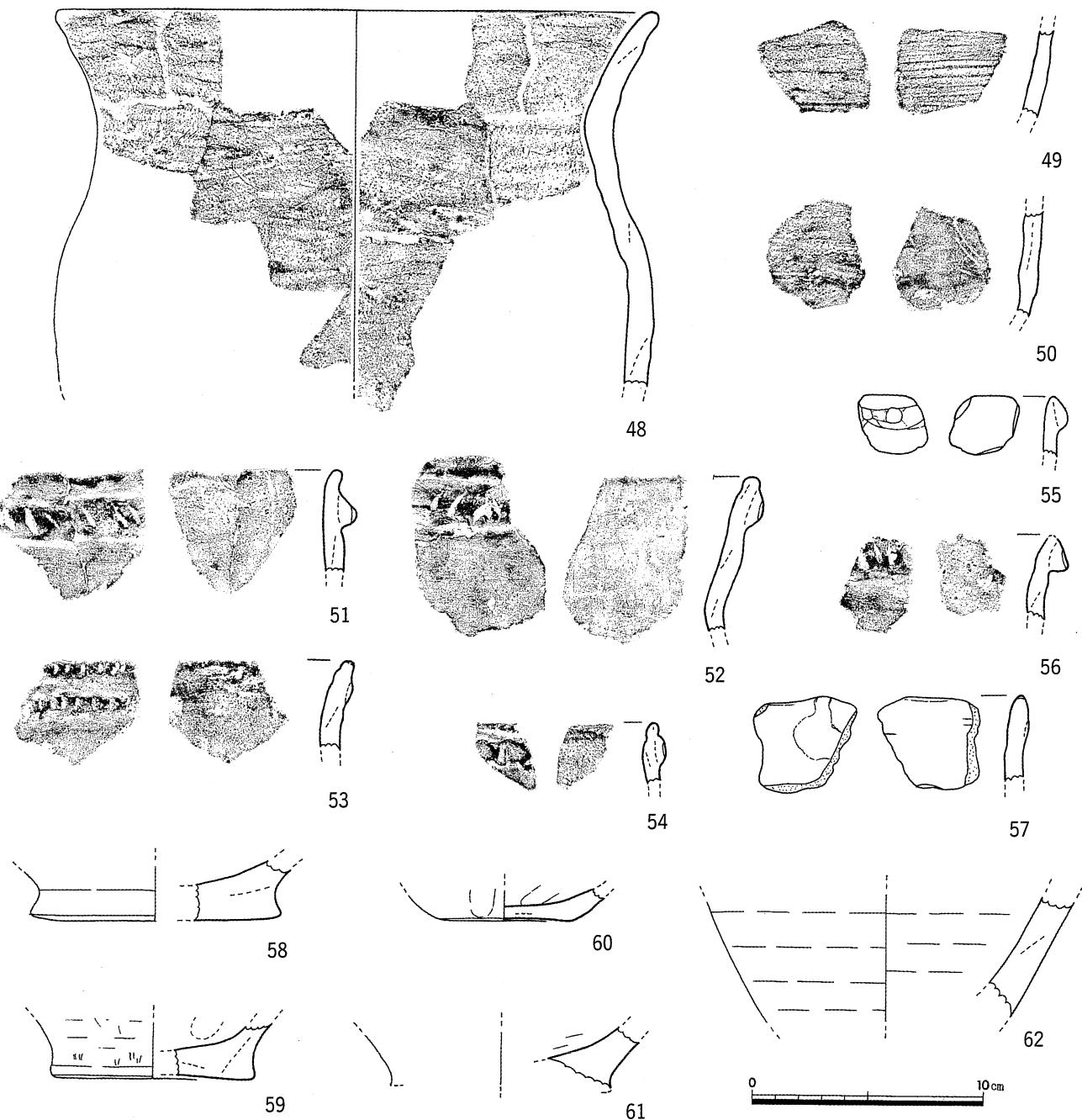
凡例
○ 土器(縄文・弥生)
* 石器類



第14図 土器実測図（1）



第15図 土器実測図（2）



第16図 土器実測図（3）

第1表 出土遺物観察表（縄文土器1）

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)		形態・手法の特徴	色調	胎土・焼成	備考
			口径	底径				
1	A-II 5層	縄文 浅鉢			内湾する口縁部 (外)沈線(5条), 擬似縄文, (内)ミガキ	外内: にぶい黄褐色	(胎)2mm以下の砂粒を含む(焼)良好	口縁～体部片
2	A-II 5層	縄文 浅鉢			内湾する口縁部, 尖り気味の口縁端部 (外)沈線(5条以上), 擬似縄文, (内)ミガキ	外内: にぶい褐色	(胎)密 (焼)良好	口縁～体部片
3	A-II SX02 5層	縄文 浅鉢	31.0		外反する口縁部 (外)ミガキ, (内)ナデ, 指圧痕	外内: にぶい褐色	(胎)3mm以下の砂粒を含む, 金雲母(焼)良好	口縁～体部片
4	A-III 3層上	縄文 浅鉢			逆「八」字状に開く口縁部 (外・内)ミガキ	外内: にぶい黄橙色	(胎)2mm以下の砂粒を含む(焼)良好	口縁～体部片
5	A-II 3層	縄文 浅鉢			外反する口縁部 (外)ミガキ, (内)条痕(二枚貝)のちミガキ	外内: 明黄褐色	(胎)3mm以下の砂粒を含む, (焼)良好	口縁～体部片
6	A-II 4層	縄文 浅鉢			逆「八」字状に開く口縁部 (外)条痕(巻貝)のちナデ, (内)ナデ	外内: 黄褐色	(胎)2mm以下の砂粒を含む, 金雲母(焼)良好	口縁～体部片
7	A-II 4層	縄文 浅鉢			外傾する口縁部, 端部直下で小さく内斜 (外)ナデ(内)凹線状のくぼみ, ナデ	外内: にぶい橙色	(胎)1mm以下の砂粒を含む(焼)良好	口縁～体部片
8	A-II 3層	縄文 浅鉢			外傾する口縁部 (外)ミガキ (内)沈線(1条), ミガキ	外: 黒灰色 内: 黑褐色	(胎)1mm以下の砂粒を含む(焼)良好	口縁～体部片
9	A-IIトレンチ 5層	縄文 浅鉢			小さく内傾する口縁, 尖り気味の端部 (外・内)ナデ	外内: にぶい褐色	(胎)1mm以下の砂粒を含む(焼)良好	口縁～体部片
10	A-II拡張 3層	縄文 浅鉢	28.0		逆「八」字状に開く口縁部, 拡張する端部 (外)ナデ, (内)ミガキのちナデ, ハケメ跡	外内: にぶい黄橙色	(胎)2mm以下の砂粒を含む(焼)良好	口縁～体部片
11	A-II 3層下	縄文 浅鉢			外傾し逆「く」字状に湾曲する体部, (外)沈線(1~2条), ミガキ, 擬似縄文(LR), (内)ミガキ, 指圧痕	外内: にぶい黄褐色	(胎)2mm以下の砂粒を含む, 金雲母(焼)良好	体部の片
12	A-II 3層	縄文 浅鉢			大きく外傾し, 逆「く」字状に屈曲する体部 (外)ミガキ, 擬似縄文(LR), (内)ミガキ	外内: にぶい黄橙色	(胎)1mm以下の砂粒を含む(焼)良好	体部の片
13	A-II 3層	縄文 浅鉢			逆「八」字状に開き直立的に屈曲する体部 (外)ミガキ, 擬似縄文(巻貝), (内)ミガキ	外内: にぶい橙色	(胎)1mm以下の砂粒を含む(焼)良好	体部の片
14	A-II 4層	縄文 浅鉢			内湾気味の体下部, (外)平行凹線(2条), ミガキ, (内)ミガキのちナデ(一部)	外内: にぶい橙色	(胎)1mm以下の砂粒を含む	体部の片
15	A-II 5層	縄文 浅鉢			内湾気味で屈曲する体部 (外)沈線(屈曲部), ミガキ, (内)ミガキ	外内: にぶい黄橙色	(胎)2mm以下の砂粒を含む(焼)良好	体部の片
16	A-II 4層	縄文 深鉢(?)			逆「く」字状に屈曲する体部 (外・内)ミガキ	外内: にぶい黄橙色	(胎)蜜 (焼)良好	体部の片 内: スス付着
17	A-II拡張 4層下	縄文 浅鉢			大きく外傾する体部 (外)沈線(焼成後), ミガキ, (内)ミガキ	外内: 灰黄褐色	(胎)1mm以下の砂粒を含む, 金雲母(焼)良好	体部の片
18	A-II 3層	縄文 浅鉢			外反する口縁部, 逆「く」字状の屈曲部 (外・内)ミガキ, ナデ(?)	外内: 黄褐色	(胎)1mm以下の砂粒を含む, 金雲母(焼)良好	体部の片
19	A-II 3層	縄文 浅鉢			逆「八」字状に大きく開く体部 (外)粗いナデ(内)ナデ	外内: にぶい黄褐色	(胎)1mm以下の砂粒を含む, 金雲母(焼)良好	体部の片 外: スス付着
20	A-II 3層	縄文 浅鉢			外反する口縁部, ゆるく逆「く」字状の屈曲部 (外)ミガキ のちナデのち三角形状文様(沈線) (内)ミガキ のちナデ	外内: にぶい褐色	(胎)1mm以下の砂粒を含む, 金雲母(焼)良好	体部の片
21	A-II 東区2層上	縄文 浅鉢			逆「く」字状に屈曲する体部, 「く」字状に屈曲する口縁部, (外・内)ナデ	外内: 黄褐色	(胎)2mm以下の砂粒を含む(焼)良好	体部の片
22	A-II 4層	縄文 浅鉢			逆「く」字状に屈曲する体部, 「く」字状に屈曲する口縁部(外・内)ナデ(?)	外内: 黄褐色	(胎)3mm以下の砂粒を含む(焼)良好	体部の片 風化気味
23	A-II 5層	縄文 浅鉢			ゆるくすぼまり下降する体下部 (外・内)ミガキ(入念)	外: 明黄褐色 内: にぶい黄褐色	(胎)2mm以下の砂粒を含む, 金雲母(焼)良好	体部の片
24	A-II 3層	縄文 深鉢			外傾する体部, 肥厚し内湾する口縁部, (外)ハケのちナデ, 擬似縄文(RL), (内)ハケのちナデ指圧痕	外内: にぶい橙色	(胎)2mm以下の砂粒を含む, 金雲母(焼)良好	体～口縁部の片
25	A-II 6層	縄文 深鉢			大きく内湾する口縁部, (外)沈線(5条), 連続刻み(烈点状), 磨り消し無文, 擬似縄文(LR, 卷貝), (外・内)ミガキ	外内: にぶい黄橙色	(胎)3mm以下の砂粒を含む(焼)良好	体～口縁部の片 内: スス付着
26	A-II 5層	縄文 深鉢			外反する体部, 平坦面をもつ端部, (外)ハケのちナデのち沈線(2条) (内)ナデのち沈線(1条)	外内: 灰黄褐色	(胎)2mm以下の砂粒を含む, 金雲母(焼)良好	体～口縁部の片
27	B-II 3層	縄文 深鉢			大きく逆「八」字状に開く体部, 逆「く」字状に屈曲する口縁部 (外・内)ミガキ	外: にぶい赤褐色 内: 黑褐色	(胎)3mm以下の砂粒を含む, 金雲母(焼)良好	体～口縁部の片
28	A-II 4層	縄文 壺			外反する体部, 屈曲(小)する口縁部 (外)条痕, (内)ナデ指圧痕	外内: 明黄褐色	(胎)2mm以下の砂粒を含む(焼)良好	体～口縁部の片
29	A-II 東3層	縄文 壺			短く外反する口縁部 (外)ミガキ(内)ナデ	外: にぶい黄色 内: 明黄褐色	(胎)1mm以下の砂粒を含む	体～口縁部の片 風化
30	A-II 4層	縄文 深鉢			直立的な口縁部 (外)条痕(巻貝) (内)ナデのち指圧痕	外内: にぶい褐色	(胎)3mm以下の砂粒を含む, 金雲母(焼)良好	体～口縁部の片 外: スス付着
31	A-II 5層	縄文 深鉢			外傾する口縁部 (外)条痕のちナデ, (内)ナデ(板状工具)	外内: にぶい褐色	(胎)2mm以下の砂粒を含む(焼)良好	体～口縁部の片 外: スス付着

第2表 出土遺物観察表（縄文土器2）

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)		形態・手法の特徴	色調	胎土・焼成	備考
			口径	底径				
32	A-II 4層	縄文 深鉢			外反する口縁部 (外・内)ナデ (条痕後か?)	外内：にぶい褐色	(胎)2mm以下の砂粒を含む(焼)良好	体～口縁部の片
33	A-II 5層	縄文 深鉢			外傾する口縁部 (外・内)ミガキ，一部ナデ	外内：にぶい黄褐色	(胎)2mm以下の砂粒を含む，金雲母(焼)良好	体～口縁部の片
34	A-II 5層	縄文 深鉢			外反気味の口縁部 (外)条痕(二枚貝)，(内)ナデ	外：にぶい褐色 内：にぶい橙色	(胎)2mm以下の砂粒を含む，金雲母(焼)良好	体～口縁部の片
35	A-II 3層	縄文 深鉢			逆「八」字状の口縁部 (外)沈線，縄文(LR)，ナデ(内)ナデ	外内：にぶい黄褐色	(胎)2mm以下の砂粒を含む	体～口縁部の片 風化
36	A-II 4層	縄文 深鉢			外反し尖り気味の口縁部 (外・内)条痕	外内：にぶい黄褐色	(胎)1mm以下の砂粒を含む(焼)良好	体～口縁部の片
37	A-II 3層	縄文 深鉢			外反する口縁部 (外)条痕(巻貝)，(内)条痕(二枚貝)	外内：にぶい橙色	(胎)2mm以下の砂粒を含む，金雲母(焼)良好	体～口縁部の片
38	A-II 3層	縄文 深鉢			外反する口縁部 (外)ナデ，ミガキ，口縁刻目(V字)，(内)ナデ	外内：にぶい黄橙色	(胎)1mm以下の砂粒を含む，金雲母(焼)良好	体～口縁部の片
39	A-II 5層	縄文 深鉢			内湾気味の体部 (外)縄文(太いLR)，ミガキ (下方を消す)，(内)ナデのち指ナデ	外内：にぶい黄橙色	(胎)1mm以下の砂粒を含む，金雲母(焼)良好	体部の片
40	A-II 4層	縄文 深鉢			内湾する体部 (外)粗い条痕(巻貝)，(内)条痕(二枚貝)	外内：灰黄褐色	(胎)3mm以下の砂粒を含む(焼)良好	体部の片 外：スス付着
41	A-II 4層	縄文 深鉢			体部 (外)条痕，(内)ナデのち指ナデ	外内：浅黄橙色	(胎)2mm以下の砂粒を含む(焼)良好	体部の片 外：スス付着
42	A-II 北トレンチ	縄文 深鉢			体部 (外・内)条痕(巻貝)のナデ	外内：にぶい黄橙色	(胎)2mm以下の砂粒を含む，金雲母(焼)良好	体部の片 外：スス付着
43	A-II 4層	縄文 深鉢			外反する口縁部，逆「く」字状の屈曲部，(外)ハケのち粗いナデ(指頭?)，(内)ナデ，指ナデ	外内：にぶい黄橙色	(胎)4mm以下の砂粒を含む，金雲母(焼)良好	体部の片
44	A-I 6層	縄文 深鉢			(外)条痕(二枚貝)のちナデ，(内)条痕(二枚貝)	外内：にぶい黄橙色	(胎)2mm以下の砂粒を含む(焼)良好	体部の片
45	A-II 5層	縄文 深鉢			(外)浅い沈線群(ナナメ→ヨコ→タテ)，(内)ナデ	外内：にぶい黄橙色	(胎)1mm以下の砂粒を含む(焼)良好	体部の片
46	A-II 3層下	縄文 深鉢			(外)条痕(二枚貝)，(内)条痕(二枚貝)のちナデ	外内：にぶい黄橙色	(胎)3mm以下の砂粒を含む(焼)良好	体部の片
47	A-II 3層	縄文 深鉢			体部 (外)ケズリ(?)，(内)条痕(二枚貝)	外内：にぶい橙色	(胎)2mm以下の砂粒を含む(焼)良好	体部の片
48	A-II 4層～5層	縄文 深鉢	26.0		逆「八」字状の口縁部，弓状に大きく湾曲の頸部， (外)ヨコナデ，太い条痕，ナデ(板状工具)，(内) 条痕(粗いヨコナデ)	外：にぶい黄橙色	(胎)2mm以下の砂粒を含む(焼)良好	体部の片 内：コゲ目付着
49	A-II 3層	縄文 深鉢			体部 (外・内)条痕(二枚貝)	内：にぶい黄褐色 外内：にぶい黄橙色	(胎)2mm以下の砂粒を含む，金雲母(焼)良好	体部の片
50	A-II 3層	縄文 深鉢			体部 (外)条痕(二枚貝)，(内)ナデ	外内：にぶい黄橙色	(胎)2mm以下の砂粒を含む(焼)良好	体部の片
51	A-II 5層	縄文 深鉢			突帯文(太く高い)，(外)刻目(LR，沈線状)，ナ デ，指圧痕，(内)ハケのちナデ	外内：黄褐色	(胎)3mm以下の砂粒を含む，金雲母(焼)良好	体～口縁部の片
52	A-II 5層	縄文 深鉢			突帯文(断面は台形状，太く高い)，(外)刻目(LR 方向鋭く切り込む)，ナデ(内)ナデ	外内：灰黄褐色	(胎)2mm以下の砂粒を含む，金雲母(焼)良好	体～口縁部の片
53	A-II 中央トレンチ	縄文 深鉢			突帯文(幅広く扁平)，(外)刻目(にぶい「V」字 形)，ナデ，(内)粗い条痕のちナデ	外内：にぶい黄橙色	(胎)1mm以下の砂粒を含む，金雲母(焼)良好	体～口縁部の片
54	A-II 5層	縄文 深鉢			突帯文(幅広く扁平) (外)刻目(押引き状)，沈線(1条)，(内)ナデ	外内：にぶい黄橙色	(胎)1mm以下の砂粒を含む(焼)良好	体～口縁部の片
55	A-II 3層	縄文 深鉢			突帯文(太い) (外)刻目(太いD字形)，(内)ナデ	外内：浅黄橙色	(胎)2mm以下の砂粒を含む(焼)良好	体～口縁部の片
56	A-II 5層	縄文 深鉢			突帯文(断面は三角形，幅広) (外)刻目(鋭い「V」字形)，(内)ナデ	外内：黄褐色	(胎)2mm以下の砂粒を含む，金雲母(焼)良好	体～口縁部の片
57	A-II 5層	縄文 深鉢			口縁部 (内)ナデ	外内：にぶい黄橙色	(胎)3mm以下の砂粒を含む，金雲母	体～口縁部の片 外：コゲ目付着
58	A-II 4層	縄文 底部	11.0		底部：平底(やや反氣味)，立ち上りはしづる (外・内)ナデ	外内：にぶい黄褐色	(胎)3mm以下の砂粒を含む，金雲母(焼)良好	底部の片
59	A-Iトレンチ 4層	縄文 底部	9.0		底部：くぼむ，立ち上りはしづる (外)粗いナデ (内)ナデのち指圧痕	外内：浅黄橙色	(胎)3mm以下の砂粒を含む，金雲母(焼)良好	底部の片
60	A-II 南5層	縄文 鉢底部	6.0		底部：平底 (外・内)ナデ	外内：浅黃色	(胎)1mm以下の砂粒を含む，金雲母(焼)良好	底部の片
61	A-II 5層	縄文 深鉢底			立ち上りはしづり気味 (外・内)ナデ	外内：にぶい黄橙色	(胎)2mm以下の砂粒を含む，金雲母(焼)良好	底部の片
62	A-I 3層	縄文 深鉢底			逆「八」字状に開く体部 (外・内)ナデ	外内：にぶい黄橙色	(胎)5mm以下の砂粒を含む，金雲母(焼)普	体部の片，内：炭化付着(煮炊物)

2. 弥生土器（第17図・図版6-2、11・第3表）

63～77までが弥生土器で、このうち63～65が前期の土器である。63は壺で口縁部が大きく外反し、端部はやや平面的に仕上げる。頸部から上胴部は「八」字状に大きく開き、口縁と頸部の境に段を残す。松本・石見I-2期のものと判断した。64は甕の体部下半部片で、やや内湾気味に外傾しながら立ち上がる。外側はタテハケのちナデ、内側はタテハケのち指ナデで仕上げる。

66・67は中期中葉の壺片である。いずれも口縁端部にヘラによる羽状文が見られ、朝顔形に大きく開く器形が考えられる。色調は明黄褐色で松本・石見III-1に属するものと判断した。70も中期中葉の壺片であるが、山口県宮ヶ久保遺跡から出土した壺に類似する。口縁部は大きく朝顔状に開き、端部を斜目上下に少し拡張し、端上部は上方につまみ出す。外側に幅広の凹線状くぼみ部が見られる。

68・69・72～77は中期後葉の土器である。このうち68・69は壺の口縁部片で山口県の宮ヶ久保遺跡TC III系である。口縁部は大きく朝顔状に開き、斜目上下に拡張して外側に幅広の凹線状の窪みがある端部へと続く。拡張部の整形はつまみ出しである。72～75は甕の口縁部片である。このうち74は宮ヶ久保遺跡C溝下層から出土した甕形土器と類似する。口縁部は大きく外反し、斜目上下に拡張し、外側に平坦面をもつ口縁端部へと続く。端部はつまみ出し、頸部は弓状に湾曲する。75は宮ヶ久保遺跡A溝下層から出土した甕形土器と類似する。口縁部は短く大きな逆「八」字状に開き、斜目上下に拡張し、外

第3表 出土遺物観察表（弥生土器）

挿図 番号	出 土 地 点	器種	法 量(cm)		形態・手法の特徴	色 調	胎土・焼成	備 考
			口径	底径				
63	A-II 3層	弥生 壺	28.0		大きく外反する口縁部、口縁と頸部の境に段 (外)ナデのち指ナデ、ハケのちナデのち指ナデ (内)ハケのち指ナデ、ハケのちナデケシ	外内；にぶい黄橙色	(胎)2mm以下の砂粒を含む、金雲母(焼)良好	体～口縁部の片
64	A-II 5層 A-I 4層	弥生 甕			外傾する体部、(外)タテハケのちナデ (内)タテハケのち指ナデ	外内：明黄褐色	(胎)3mm以下の砂粒を含む、金雲母(焼)良好	体部の片
65	A-II 拡張 3層	弥生 甕			(外)タテハケ、(内)タテハケのちナデ		(胎)2mm以下の砂粒を含む(焼)良好	体部の片
66	西トレンチ 4層	弥生 壺			朝顔状に大きく開く口縁部 (外)羽状文、ヨコナデ、(内)ヨコナデ	外内：明黄褐色	(胎)2mm以下の砂粒を含む、金雲母(焼)普	口縁部の片
67	西トレンチ 4層	弥生 壺			朝顔状に大きく開く口縁部 (外)羽状文(ヘラ)、(内)ナデ	外内：明黄褐色	(胎)3mm以下の砂粒を含む	口縁部の片 風化
68	中央トレンチ 壺	弥生 壺	30.0		朝顔状に大きく開く口縁部、(外)ヨコナデ (内)ヨコナデのち指ナデ	外内：浅黄橙色	(胎)2mm以下の砂粒を含む、金雲母(焼)良好	口縁部の片
69	A-I 3層	弥生 壺			朝顔状に大きく開く口縁部 (外・内)ヨコナデ	外内：浅黄橙色	(胎)2mm以下の砂粒を含む、金雲母	口縁部の片 風化
70	西トレンチ 4層	弥生 壺			朝顔状に大きく開く口縁部 (外・内)ナデ	外内：浅黄橙色	(胎)2mm以下の砂粒を含む、金雲母(焼)良好	口縁部の片 風化
71	A-II 3層	弥生 壺			「八」字状に開く体上部、断面三角形の突堤 (外)ナデ、(内)ナデ、指圧痕	外内：浅黄橙色	(胎)1mm以下の砂粒を含む、金雲母(焼)良好	体部の片
72	A-II 4層	弥生 甕	12.4		単純口縁、短く逆「八」字状に開く口縁部 (外)ナデのち指圧痕、ハケのちナデ (内)ナデのち指圧痕	外内：にぶい黄橙色	(胎)2mm以下の砂粒を含む (焼)良好	体～口縁部の片 外・内：スス付着
73	A-II 3層	弥生 甕	15.0		単純口縁、短く逆「八」字状に開く口縁部 (外)ナデ、粗いハケ、(内)不明	外内：浅黄橙色	(胎)2mm以下の砂粒を含む(焼)良好	体～口縁部の片
74	A-I 3層	弥生 甕	15.0		大きく外反する口縁部 (外)ナデ、(内)ナデ、指圧痕	外内：浅黄橙色	(胎)2mm以下の砂粒を含む(焼)普	体～口縁部の片
75	中央トレンチ 甕	弥生 甕	16.4		短く逆「八」字状に開く口縁部、(外)ヨコナデ、 ハケのちナデ、(内)ヨコナデのち指圧痕、ナナメナデ	外内：にぶい黄橙色	(胎)2mm以下の砂粒を含む、金雲母(焼)良好	体～口縁部の片
76	A-I 3層	弥生 甕底部	5.4		平底(上底気味)の底部 (外)ハケのち指ナデ、(内)指ナデ	外内：にぶい黄橙色	(胎)2mm以下の砂粒を含む(焼)良好	底部の片 外：スス付着
77	A-II 4層	弥生 甕底部	6.0		平底の底部、立ち上りにしぶり (外)ナデ、(内)ナデ、指圧痕	外内：にぶい黄橙色	(胎)2mm以下の砂粒を含む(焼)良好	底部の片 内：スス付着

面中央部が少し窪む端部へと続く。頸部はゆるい「く」字状で、肩部はナデ肩である。76・77は甕の底部片である。77は平底で体部との境は明瞭、立ち上がりにしづらぎがみられる。内側はナデのち指圧痕で仕上げている。

3. 須恵器・土師質土器・陶磁器類（第18図・図版6-3、12-1~3・第4表）

78~85までが須恵器である。78は深みのある蓋杯の蓋で、体部と天井部の境はにくく突出する。突出の上下に凹線を施し、体部は少し開きながら口縁端部に至る。6世紀後半の出雲III期に併行するものと思われる。79・80も6世紀後半~7世紀初の蓋杯の蓋である。81は6世紀後半~7世紀前半の長頸壺頸の胸片である。体部は偏球形を呈し、中程に1条の凹線を施している。82~85は須恵質の土器であることは間違えないものの詳細については判らなかった。

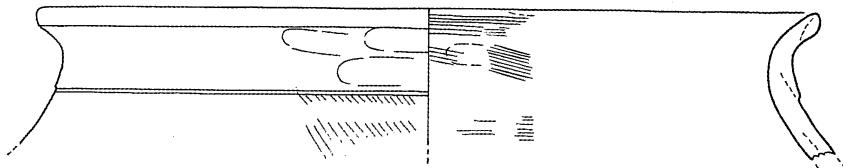
86~88・92~94は土師器である。86は一見縄文土器の浅鉢に似ているが、III期の須恵器に伴う土師器と思われる鉢の口縁部片で、短く逆「八」字状に小さく開き、平坦気味の端部へと続く。87は杯の口縁部片で、体部は内湾しながら立ち上がり、尖り気味の口縁端部へと続く。底部に回転糸きり痕がある。

89・90は龍泉窯系青磁の碗である。いずれも13~14世紀のもので、鎬蓮弁文様を施している。89は明オリーブ灰色で、直線的に広がり、尖り気味の口縁端部へと続く。91は陶器の口縁部片で擂鉢ではないかと思われた。92~94は土師質土器の杯の底部片である。いずれも1mm以下の砂粒を僅かに含む密な胎土で、底部は回転糸切り痕が確認できる。95は磁器の碗である。高台部から体下部に3重の線文様、体部に植物文様、底部に1重線を施している伊万里系。96はSK01内から出土した石見焼の擂鉢片で、17条以上の単位で左回りの擂目を施している。

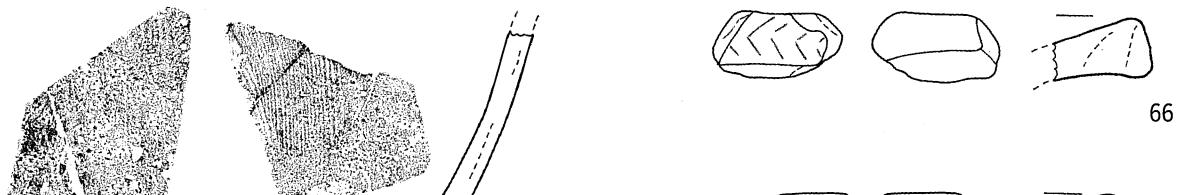
4. 土錐（第18図・図版12-4・第3表）

97~102が土錐である。すべて円錐型を呈しており、タテ方向に約4mm程度の穴をあけてある。このうち97は、長さ4.5cm、色調は浅黄橙色、1mm以下の砂粒を僅かに含んでいる。98~102は、一部分が破損しているものが多く、全長は確かではないが、ほぼ同じ大きさと形を呈している。これらの土錐の年代については確定できないものの、おそらく中世以降であると判断した。

(中井 将胤)



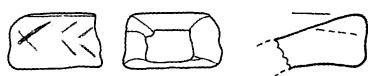
63



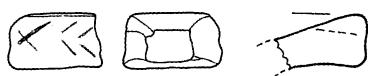
64



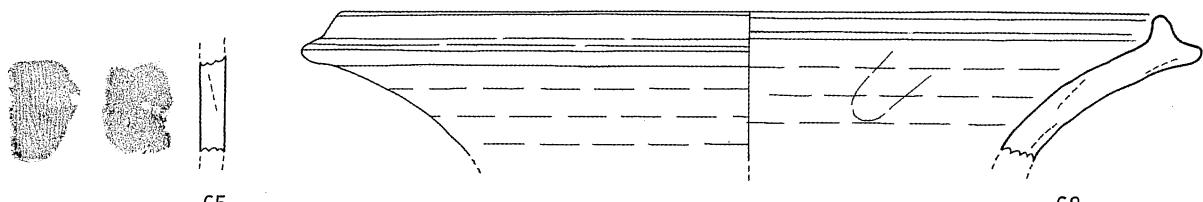
65



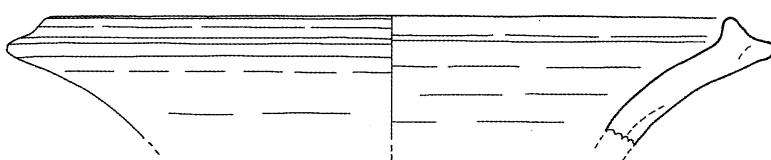
66



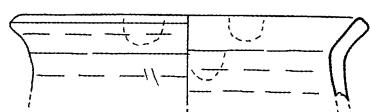
67



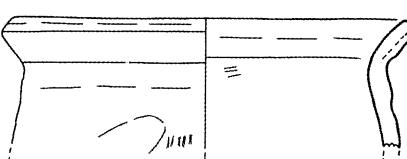
68



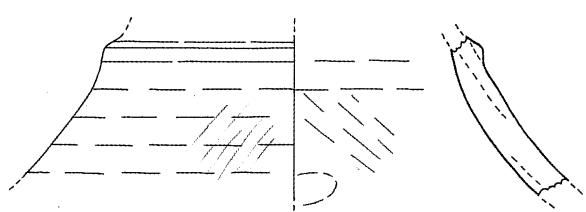
69



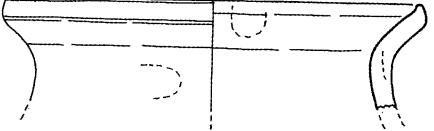
70



71

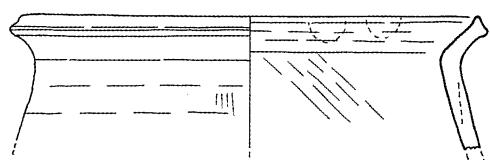


72

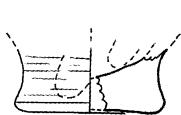


73

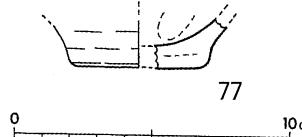
74



75



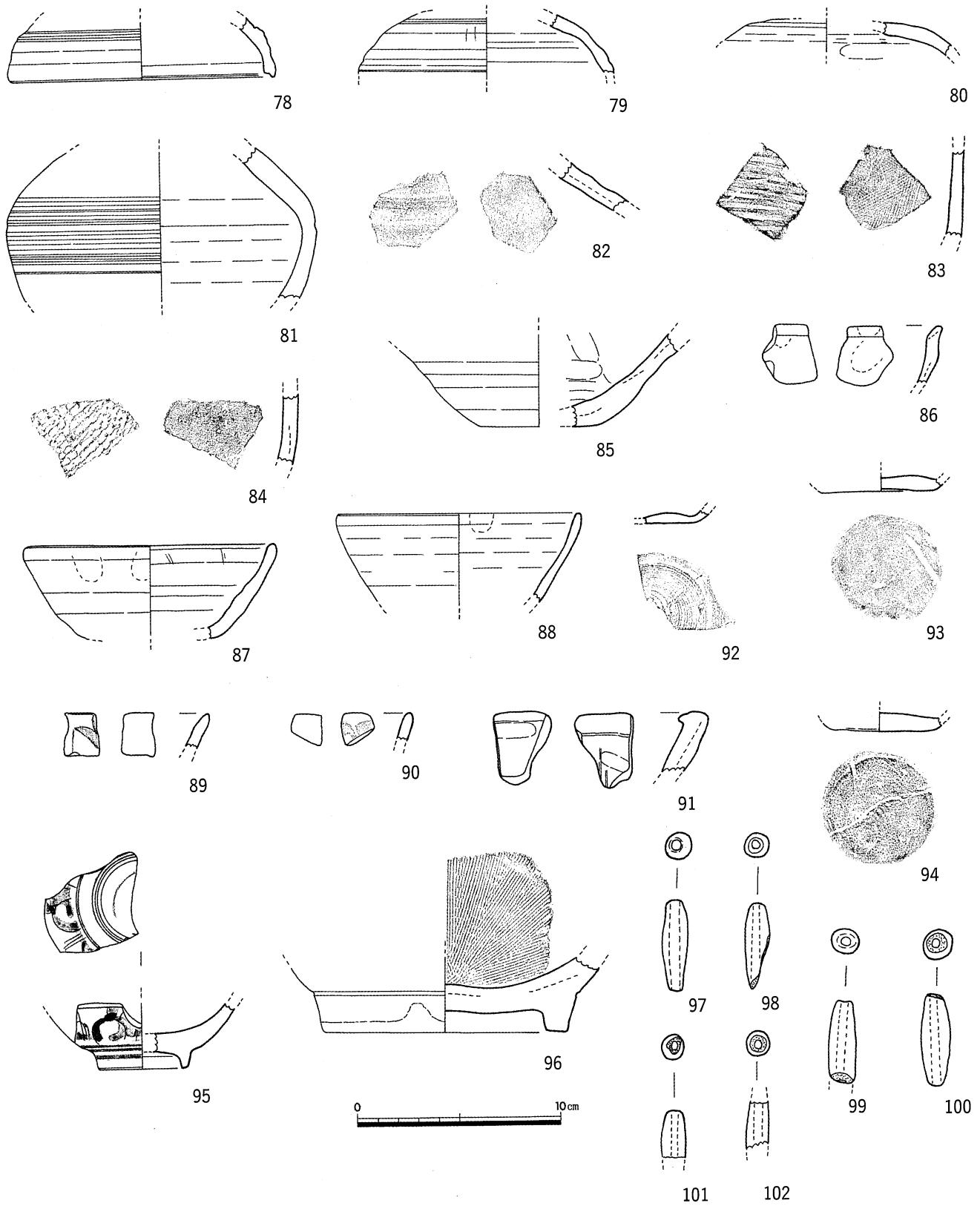
76



77

0 10 cm

第17図 土器実測図 (4)



第18図 土器実測図（5）

第4表 出土遺物観察表（その他）

挿図 番号	出 土 地 点	器種	法 量(cm)		形態・手法の特徴	色 調	胎土・焼成	備 考
			口径	底径				
78	A-III 3層	須恵器 蓋	13.0		天井部体部境に突帯、上下凹線 (外・内)回転ナデ	外内：褐灰色	(胎)密 (焼)良好	体部の片
79	A-III 3層	須恵器 蓋			浅く幅広の凹線がある体部 (外・内)強い回転ナデ	外内：オリーブ灰色	(胎)密 (焼)良好	体部の片
80	A-II 3層	須恵器 蓋			(外)回転ナデ、(内)回転ナデのち指ナデ	外内：灰色	(胎)密 (焼)良好	体部の片
81	A-III 3層	須恵器 壺			偏球形の体部 (外)カキ目のちナデ、カキ目、(内)回転ナデ	外内：灰黄褐色	(胎)密 (焼)良好	体部の片
82	A-II拡張 3層	須恵器 不明			(外)強い回転ナデ、(内)ナデ	外内：灰色	(胎)密 (焼)良好	体部の片
83	A-I 3層	須恵器 不明			(外)粗い条痕の叩き目 (内)ハケメ()のちナデ	外内：にぶい黄橙色	(胎)密 (焼)良好	体部の片
84	A-II拡張 3層	須恵器 甕			(外)格子状のタタキメ、(内)回転ナデ(ヨコ)	外内：灰色	(胎)2mm以下の砂粒を 含む(焼)良好	体部の片
85	A-II拡張 2層	須恵器 鉢(?)			平底の底部、逆「八」字状の体部 (外)回転ナデ、(内)指ナデ	外内：淡灰色	(胎)密 (焼)良好	底部の片
86	A-II 4層	土師鉢 (?)	7.0		短く逆「八」字状に開く口縁部 (外・内)ナデ	外内：にぶい黄褐色	(胎)1mm以下の砂粒を 含む、金雲母(焼)良好	体～口縁部の片
87	A-II 3層	土師質 坏	13.2		内湾する体部、(外)ヨコナデのち指圧痕、 回転糸切り痕、(内)ヨコナデ	外内：にぶい黄橙色	(胎)2mm以下の砂粒を 含む、金雲母(焼)良好	体～口縁部の片
88	中央トレンチ 3層	土師質 坏	12.0		薄手、逆「八」字状に開く体部 (外・内)回転ナデ	外内：明黄褐色	(胎)密 (焼)良好	体～口縁部の片
89		陶磁器 碗			青磁(龍泉窯) (外)鎬蓮弁文(削り出し)	外内：明オリーブ灰色	(胎)緻密 (焼)良好	口縁部の片 13～14世紀
90	A-I 3層	陶磁器 碗			青磁(龍泉窯) (外)鎬蓮弁文	外：淡灰色 内：緑灰色	(胎)緻密 (焼)良好	口縁部の片 13～14世紀
91	A-I 3層	陶器 鉢			逆「八」字状に開く口縁部、内側に鉤状に屈曲 する端部、(外)ナデのち指ナデ、(内)ナデ のち指ナデのちタテ方向の条痕(擂目か)	外内：にぶい黄橙色	(胎)2mm以下の砂粒を 含む(焼)良好	体～口縁部の片 擂鉢か
92	西トレンチ 4層	土師質 坏(底)			薄手、平底の底部、高台付きか (外)回転糸切り痕、(内)強いナデ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄橙色	(胎)1mm以下の砂粒を 含む(焼)良好	底部の片
93	A-I拡張 3層	土師質 坏(底)	約 5.4		わずかな上底の底部、(外)回転糸切り痕のち ナデ、(内)強い回転ナデ	外内：明黄褐色	(胎)密	底部の片
94	A-II拡張 3層下	土師質 坏(底)			やや反り気味の底部、(外)回転糸切り痕のち ナデ(?)、(内)回転ナデのちナデ	外内：にぶい黄橙色	(胎)1mm以下の砂粒を 含む(焼)良好	底部の片
95	A-I 2層	磁器 碗	高台径 4.4		伊万里系 (外)3重の線文様、植物文様、1重線文様	胎：灰白色 文様：藍色	(胎)緻密 (焼)良好	高台～体部の片 施釉、江戸時代
96	A-III SX-01	磁器 擂鉢	高台径 12.0		石見焼、高台と体部の境に凹線 (内)左回りの擂目(17条以上)	胎：にぶい黄橙色 釉：赤褐色	(胎)1mm以下の砂粒を 含む(焼)良好	高台～体部の片、高 台部3/4～体部施釉
97	A-I 2層	土鍾	長さ 4.5	厚さ 1.3	孔径 0.5 円錐形	外内：浅黄褐色	(胎)1mm以下の砂粒を 含む(焼)良好	完形
98	A-III 3層	土鍾	1.2	0.4	円錐形	外内：にぶい黄橙色	(胎)蜜 (焼)良好	約2/3の片
99	A-II拡張 2層	土鍾	1.3	0.4	円錐形	外内：にぶい黄橙色	(胎)蜜 (焼)良好	破片
100	A-II 2層	土鍾	1.9	0.4	円錐形	外内：にぶい橙色	(胎)1mm以下の砂粒を 含む(焼)良好	上下欠損
101	A-I 3層上	土鍾	1.2	0.4	円錐形	外内：浅黄褐色	(胎)蜜 (焼)良好	破片
102	A-II 3層下	土鍾	1.1	0.4	円錐形	外内：にぶい黄褐色	(胎)1mm以下の砂粒を 含む(焼)良好	半分欠損

5. 石器類（第19～21図 図版6-4～6・13 第5表）

1～23は、打製石斧（土堀具）である。この種は出土石器のうち、最も多く確認されており、そのうち23点を図示した。1～20は完形品で、または欠損部分が小さく、全体の形状が比較的わかるもので、21～23は基部を欠損し、刃部のみ残っているものである。全体の形状がわかるものについて、大きさをみると、やや大型で長さ約9～12cmのものがほとんどを占めるが、8、9、10のように6～7cmの小型のものもみられた。また、ほとんどが厚さ1～2cmの比較的薄手のものであった。

形態については、平面形、両側縁の形状から、側縁がほぼ、短冊状に平行する短冊形のもの、またそれに近い形状を呈するものと、基部先端が細くなっていた、刃部が撥形に開く撥形のものなどがみられるが、加工の施し方が少なく、形状のいびつなものもある。短冊形のものには1～9、19があたり、撥形のものには10～16があたる。また刃部の形状は、直線的なものや、U字形を呈するものなどがある。

製作過程については、扁平な板状素材を作り出し、それに周縁から剥離加工を施して仕上げられているものが多いとおもわれる。しかし、中には4のように、両面と上下両端部に自然礫面をとどめており、扁平な礫そのものに直接加工を施していると思われるものもみとめられた。

さらに、使用されている石材については、ホルンフェルス（原岩は珪質頁岩）製のものがほとんどであった。その他には頁岩、極細粒砂岩、ホルンフェルス（原岩は砂岩、または極細粒砂岩）製のものがみとめられた。

次に、各石斧について少し詳細にみておく。まず、1～5、7はやや長細い短冊形のもので、比較的薄手のものである。1は刃縁がやや磨耗しており、2、5、7は刃部と基部側縁に磨耗部分がみとめられた。1、3は基端を欠損している。4は両面、上下両端に自然面が残っており、両側縁を中心にして剥離加工が施されている。また、7は片面の大きな面は主要剥離面と思われ、周縁のみに加工が施されている。6はこの中ではやや厚手のもので、橢円形に近い断面形を呈するものである。刃部に大きな剥離面が見られるが、これは欠損したものと思われる。

8、9、10は長さ6～7cm、幅4.5～6cmの小型のものである。9は厚さが1.0cmの薄手のもので、刃部と基部側縁に磨耗痕がみとめられる。10は小型の撥形のもので、片面中央に素材の面と思われる大きな面を残している。また刃部には摩耗痕がみとめられる。

11～16は撥形のものである。11はやや厚手のもので、刃部は弧状に作り出されている。基部、刃部に磨耗痕がみとめられる。12は刃部が大きく開く撥形のものである。13は一側面に切断面が見られる。欠損したものか、細かな加工はあまり見られない。全体的に磨耗している。14は一側面に切断風の剥離面がみとめられ、基端付近の一方の側面は礫面かもしれない。刃部には磨耗痕がみとめられる。15は刃部に大きな剥離面があり、欠損によるものと思われる。また片面に素材の面を残していると思われる。16は薄手のもので、全体的に加工が少なく、特に片側の縁辺にはあまり施されていない。17は天地がはっきりしない。図面下側の縁辺に磨耗痕がみられる。18は加工の施し方が少なく、図面上下縁と一側縁には加工がほとんど施されていない。19は側縁を中心に加工が施されている。片面に素材の面を大きく残していると思われる。20は片方の側縁への加工が少なく、形がいびつなものである。また両側面に自然面を残している。

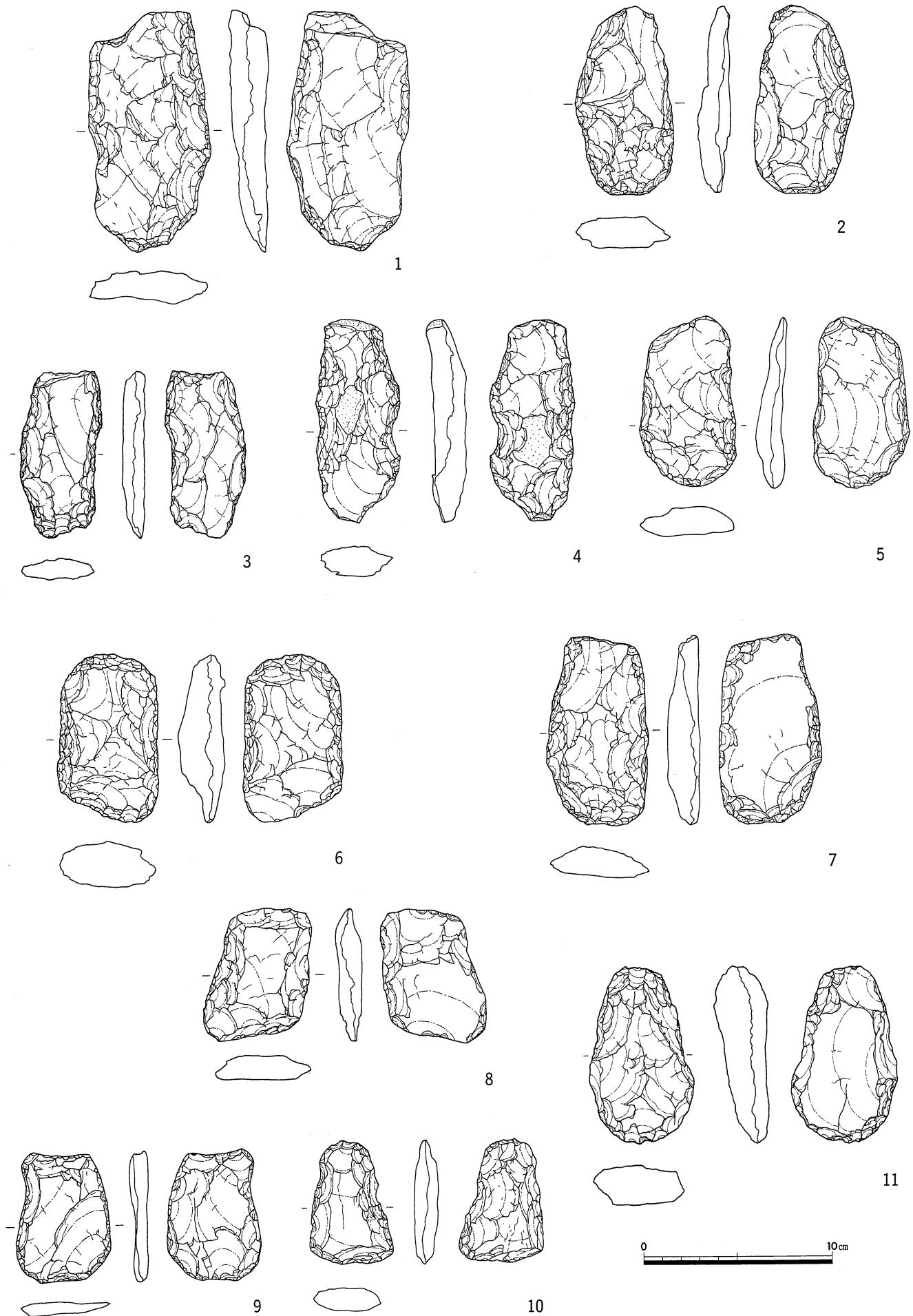
21、22、23 は基部を欠損し刃部のみ残っているものである。U字形、また弧状を呈する刃部である。21 の両面の残る大きな面は、節理面と思われる。刃部には磨耗痕がみとめられる。22 もやや磨耗している。23 は片面に自然面と思われる部分が大きく残っており、刃部には磨耗痕がみとめられる。

24 はハンマーストーンである。楕円気味の円礫を利用したもので、敲打痕、また敲打に伴なうと思われる剥離痕がみとめられる。石材は、珪長質凝灰岩または石英斑岩。25、26 は敲石である。いずれも側面に部分的に敲打痕がみとめられる。25 は両面が平坦に近い面をもつ円礫を用いている。石材は 25、26 いずれも珪長質凝灰岩。

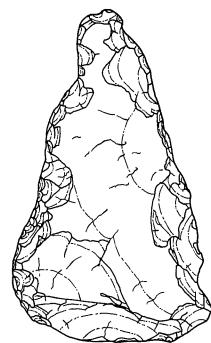
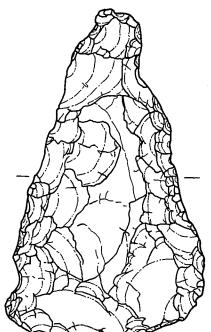
27~31 は石鏸である。27、28 は凹基無茎式石鏸である。27 は長さ 2.8 cm、幅 2.0 cm を測る比較的大きなものである。基部の抉りはごく浅い。28 はほぼ全面に加工が施されているが、片面の先端付近に、自然面と思われる部分を残している。基部の抉りに浅い。29 は平基無基式石鏸で、片面に大きく剥片素材の面が残っており、周縁に加工が施されている。30、31 は凸基式無茎式石鏸である。30 は片面中央に素材の面が残っている。31 は基部を欠損している。両面に素材面が残り、片面は主要剥離面と思われ、周縁のみ加工されている。石鏸に使用されている石材は 27、30、31 はデイサイト、28 はメノウまたはチャート、29 は打製石斧にも利用されているホルンフェルス（原岩は珪質頁岩）である。

32 は楔形石器である。長さ 1.5 cm、幅 2.7 cm、厚さ 0.4 cm の横長の長方形を呈するもので、主に上下からの剥離痕がみとめられ、一側縁にはつぶれの痕跡がみとめられる。また図面上側の側面の一部に自然面が残っている。石材はホルンフェルス（原岩は珪質頁岩）製。

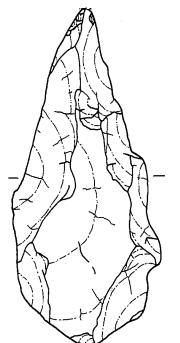
以上、これらの石器は、縄文後期中葉以降の土器に伴なうものと思われる。打製石斧が多く出土しているが、この時期、耕作技術に変化が起こったのではないかと思われた。そして、九州系の土器などが出土していることから、九州方面との交流や影響を受けていたと考えられる。



第19図 石器類実測図 (1)



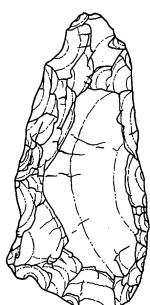
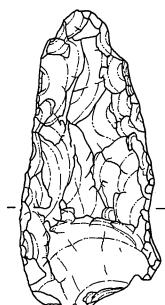
12



13



14



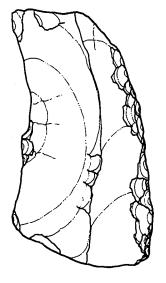
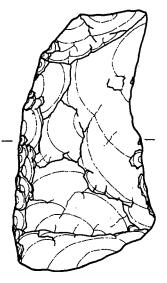
15



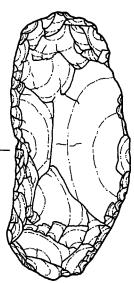
17



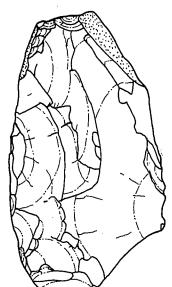
16



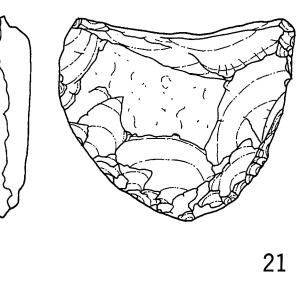
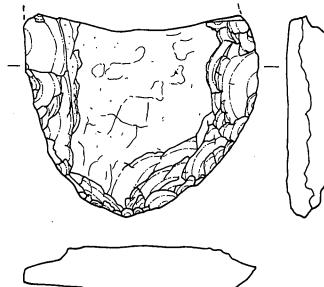
18



19



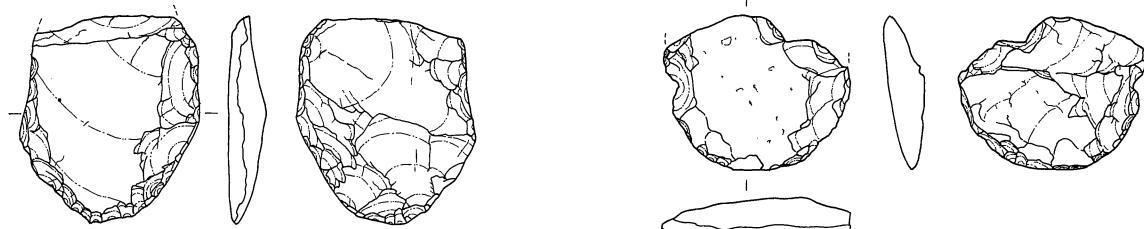
20



21

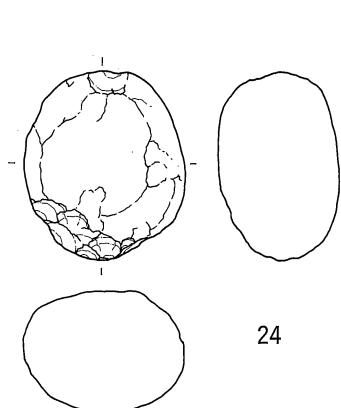


第20図 石器類実測図（2）

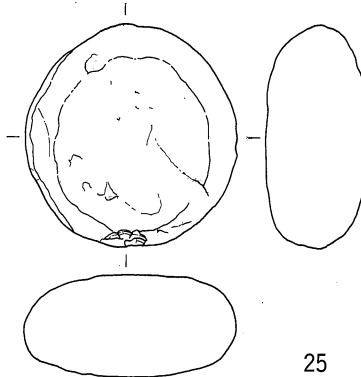


22

23

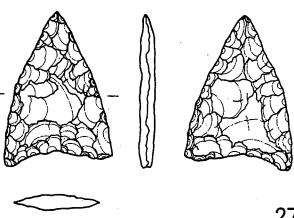


24

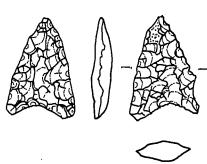


25

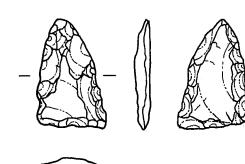
0 10 cm



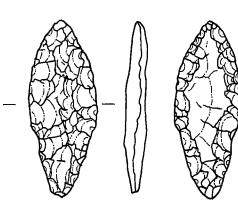
27



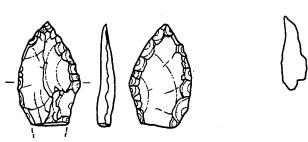
28



29



30



31



32

0 5 cm

第21図 石器類実測図 (3)

第5表 出土遺物観察表（石器類）

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	備 考
			長さ	幅	高さ		
1	A-I 3層上	打製石斧	10.8	6.4	2.0	短冊形 刃縁やや磨耗 基端欠損	極細粒砂岩を黑色頁岩の薄層
2	A-II 3層	打製石斧	9.9	5.3	1.7	短冊形 基部・側縁・刃縁一部磨耗	ホルンフェルス 源岩は珪質頁岩 弱いスレートへき開あり(日原付近のジェラ紀メランジ)
3	A-II 拡張3層上 (土堀具)	打製石斧	(8.8)	4.3	1.2	短冊形 基端欠損	ホルンフェルス 源岩は珪質頁岩
4	A-I 3層	打製石斧	10.6	4.4	1.9	短冊形 両端・両面に自然面が残る	ホルンフェルス 源岩は珪質頁岩
5	A-III 2層	打製石斧	8.9	5.1	1.5	短冊形 刃部・基部側縁磨耗部分あり	ホルンフェルス 源岩は珪質頁岩
6	A-I 3層	打製石斧	8.8	5.4	2.4	短冊形 刃部に大きな剝離面(欠損)	ホルンフェルス 源岩は極細粒砂岩 弱いスレートへき開あり
7	A-I 3層中	打製石斧	10.0	5.4	1.7	短冊形 刃縁・基部側縁磨耗部分あり	ホルンフェルス 源岩は極細粒砂岩～珪質頁岩 (日原付近のジェラ紀メランジ)
8	A-II 4層 (土堀具)	打製石斧	6.9	5.7	1.4		ホルンフェルス 源岩は珪質頁岩 マンガン十鉄のしみ込み
9	A-III 3層	打製石斧	6.85	4.95	1.0	短冊形 薄手 刃部・基部側縁磨耗部分あり	ホルンフェルス 源岩は珪質頁岩
10	B-I 3層	打製石斧	6.5	4.4	1.2	揆形 刃部付近磨耗している	ホルンフェルス 源岩は珪質頁岩 弱いスレートへき開あり
11	A-II 3層	打製石斧	9.4	5.5	2.9	揆形 刃部・基部磨耗している	ホルンフェルス 源岩は砂岩
12	A-II 4層	打製石斧	12.1	7.1	1.6	揆形	ホルンフェルス 源岩は珪質頁岩 弱いスレートへき開あり
13	A-I 3層上	打製石斧	12.3	5.5	1.6	揆形 全体的に磨耗 刃部欠か	ホルンフェルス 源岩は珪質頁岩
14	A-II 5層茶 (土堀具)	打製石斧	10.9	5.4	1.5	揆形 刃部磨耗	ホルンフェルス 源岩は珪質頁岩
15	A-II 拡張東3層上	打製石斧	10.7	5.0	1.6	揆形 刃部に大きな剝離面(欠損)	ホルンフェルス 源岩は珪質頁岩
16	A-II 3層下	打製石斧	9.7	5.2	1.1	揆形	ホルンフェルス 源岩は細粒砂岩
17	A-II 2層上	打製石斧	8.2	4.5	1.6	短冊形刃部やや磨耗	ホルンフェルス 源岩は珪質頁岩
18	A-I 西トレンチ4層 (土堀具)	打製石斧	9.4	5.2	2.1		ホルンフェルス 源岩は珪質頁岩～極細粒砂岩
19	A-I 3層上	打製石斧	9.7	4.5	1.6	短冊形	ホルンフェルス 源岩は珪質頁岩
20	A-II 4～5層	打製石斧	10.2	5.7	2.2	基部に自然面残る	ホルンフェルス 源岩は珪質頁岩～極細粒砂岩
21	A-II 3層	打製石斧	(7.4)	8.6	(1.7)	磨耗気味の刃部 両面に自然面又は節理面が残る 基部欠	極細粒砂岩 黑色頁岩の薄層を伴う
22	B-I 3層	打製石斧	(7.5)	6.5	(1.4)	刃部やや磨耗 基部欠	ホルンフェルス 源岩は珪質頁岩
23	A-II 3層	打製石斧	(5.6)	6.8	(1.5)	刃部磨耗 片面は自然面か、 基部欠	黑色、頁岩
24	A-II 4～5層	ハンマーストーン	6.85	5.85	4.4	敲打痕 敲打に伴う剝離痕あり	珪長質凝灰岩又は石英斑岩(白亜紀)
25	A-II 6層茶	敲石	8.1	7.7	3.7		含 角閃石 閃 硅長質凝灰岩
26	A-II 4～5層	敲石	7.2	7.1	4.8	敲打痕あり	珪長質凝灰岩
27	A-II 2層	石鏃	2.8	2.0	0.3	凹基無基式	デイサイト(青野山 火山群?)
28	A-I 3層上	石鏃	1.8	1.2	0.4	凹基無基式 一部自然面残る	メノウ又はチャート
29	A-II 2層上	石鏃	1.95	1.25	0.3	平基無基式 両面に素材の面残る	ホルンフェルス 源岩は珪質頁岩
30	A-I 3層	石鏃	3.2	1.2	0.4	凸基式 片面に素材の面残る	デイサイト(青野山 火山群?)
31	A-I 3層	石鏃	1.9	1.2	0.3	凸基式 片面に素材の面残る	デイサイト(青野山 火山群?)
32	A-II 拡張4層	楔形石器	1.5	2.7	0.4	一側縁つぶれている 一部自然面残る	ホルンフェルス 源岩は珪質頁岩

第5章 遺跡内における花粉分析と自然科学分析

第1節 はじめに

萬世溢遺跡は、島根県西部、鹿足郡日原町木の口に所在し、津和野川の河岸段丘上に立地する。

本報告は、日原町教育委員会の委託を受け文化財調査コンサルタント株式会社が、遺跡内での生業活動および遺跡近辺の古植生推定の目的で実施した花粉分析報告、遺構（SK02）の性格を確認するために実施したリン濃度測定報告についてまとめなおしたものである。

試料について

図1に示す各地点において分析用試料を採取した。試料採取は日原町教育委員会と協議の上、文化財調査コンサルタント株式会社が実施した。No.1、2 地点が花粉分析用試料採取地点であり、SK02、対比1、対比2とした地点がリン濃度分析用試料の採取地点である。

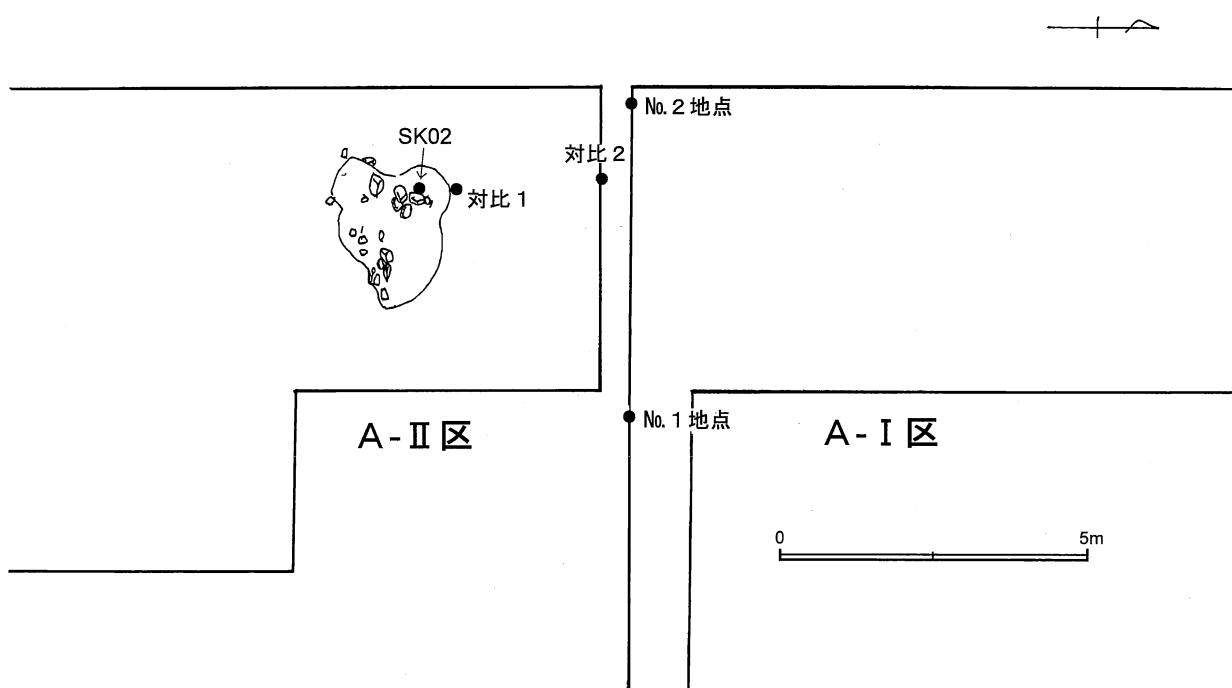


図1 試料採取地点

分析方法

花粉分析は渡辺（1995）に従って行った。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また、中村（1974）に従いイネ科花粉を、栽培種である「イネ」が含まれる可能性の高い40ミクロン以上の個体と、「イネ」が含まれる可能性の低い40ミクロン未満の個体に分けて計数している。

リン濃度測定では、地質調査所の珪酸塩分析方法に準拠して試料を溶解後、モリブデン青吸光光度法により吸光度を求め、リン濃度を算出した。吸光度の測定には日立製作所製分光光度計U-2000を使用し、波長880nmの吸光度を測定した。

第2節 分析結果

分析結果

花粉分析結果を図2、3に、リン濃度測定結果を表1に示す。

図2、3の花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として各分類群毎に百分率を算出し、木本花粉を黒塗りスペクトルで、草本花粉を白抜きスペクトルで示している。また、花粉ダイアグラム右側に「針葉樹花粉」、「広葉樹花粉」、「草本花粉」に「胞子」を加えた総合ダイアグラムを示している。総合ダイアグラムでは、計数値の合計を基数にそれぞれの百分率を算出し、累積百分率で示してある。

花粉分帶

花粉組成の特徴から、以下のように地域花粉帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を示す。また、本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料No.も下位から上位に向かって記した。

(1) II帯：No.1 地点試料No.7～3、No.2 地点試料No.2、1

木本花粉の検出量は少なかったが、草本花粉は100～700個体程度を検出した。これらの内、No.1 地点試料No.4、3では他の試料に比べ木本花粉の検出量がやや多く、草本花粉も700個体弱を検出した。一方、他の試料では木本花粉が10個体程度までの検出量であり、草本花粉も100～300個体程度の検出量であった。

種類構成で見るとNo.1 地点試料No.4、3ではアカガシ亜属、コナラ亜属がやや高率を示すほか、針葉樹種が低率ではあるが検出できた。これに対し他の試料では明確な傾向は無い。また草本花粉でも、No.1 地点試料No.4、3では他の試料に比べ検出種類数、検出個体数が多かった。

以上の様な特徴を踏まえ、下位のb亜帯（No.1 地点試料No.7～5、No.2 地点試料No.2、1）と、上位のa亜帯（No.1 地点試料No.4、3）に細分した。

(2) I帯：No.1 地点試料No.2、1

マツ属（複維管束亜属）が卓越するほか、アカガシ亜属、コナラ亜属を伴う。草本花粉では、イネ科（40ミクロン以上）、タンポポ亜科が卓越するほか、低率であるが栽培種のソバ属が検出された。

花粉検出量の少ない原因について

花粉化石の含有量の少ない原因について、一般には以下のような事が考えられている。

1. 堆積速度が速いために、堆積物中に花粉化石が含まれない。
2. 堆積物の特性（粒度・比重）と花粉化石の平均的な粒径、比重が著しく異なり、堆積物中に花粉化石が含まれない。
3. 土壤生成作用とともに堆積物で、堆積速度が極めて遅く、堆積した花粉化石が紫外線やバクテリア等により劣化消滅した。
4. 花粉化石が本来含まれていたが、堆積後の化学変化により花粉化石が消滅した。
5. 有機物に極めて富む堆積物で花粉以外の有機物が多く、処理の過程で花粉化石が回収できなかつた。

今回分析した試料のうち花粉化石の含有量が少なかった試料について、その原因是以下のように考えられる。

多くの試料では花粉化石の含有量が少なかったものの、炭が多く含まれていた。このことから、上記3（土壤生成作用に伴い紫外線等により劣化消滅）が主因である可能性がある。一方で全体に堆積物粒子が粗く、上記1（堆積速度が速い）も原因の一つであると考えられる。

SK02のリン濃度について

SK02埋土のリン濃度は、SK02ベースの対比試料1に比べやや高いものの、SK02を被う対比試料2に比べやや低い値であった。このことは現地での有機物の含有量（色調の黒さ）の観察結果と一致する。したがって各試料ともに、自然条件下で土壤化などに伴いリンが濃縮したものと考えられる。

SK02の用途として「墓」が推定されていたが、今回のリン濃度測定の結果から動物起源のリンが存在するとは考えられず、「墓」の可能性はきわめて低いと考えられる。

古環境変遷

出土遺物との関係から、II带b亜帯が弥生時代から中世、II带a亜帯が中世、I帯が中世以降の植生を反映していると考えられる。ここでは、花粉帶毎に遺跡周辺の古環境を推定する。

(1) II带b亜帯期（弥生時代～中世）

① 層序

5層上部から上位は、両地点の中間で攪乱を受けたために、明確な対応関係が分かっていない。このことから、花粉層序を基に両地点の層序の対比を試みる。

No.2地点試料No.2から1への花粉組成の変化は、No.1地点試料No.6から5への変化に類似する。仮にこの対応が成り立つとすると、No.1地点の4層がNo.2点の4、5層に対応する事になる。

現地で行った地層観察では、No.1地点で色調から4層は上下2層に細分できた。また4層下部と5層は、粒度と色調から容易に分けることが可能であった。一方、4層と5層の色調の差はNo.2地点ではほとんど無く、礫が4層で若干混入する程度の差であった。また、5層下部にやや色調が濃く細粒の部分が薄く認められた。

以上のことから、No.1 地点の 4 層上部が No.2 地点の 4 層、No.1 地点の 4 層下部が No.2 地点の 5 層上部から下部、No.1 地点の 5 層が No.2 地点の 5 層最下部に相当する可能性が指摘できる。

② 古植生

1) 下部 (弥生時代)

No.1 地点試料 No.7 層準は上位の層準に比べやや濃い色調を帯びる。概査結果では、炭、プラント・オパールの含有量が上位に比べ多い傾向にある。また、花粉の含有量も少なく、検出された花粉粒の多くは紫外線タイプの劣化を示す。これらのこととは、本層準が堆積後に土壤化を受けた（あるいは土壤化作用を受けながらの堆積）可能性を示唆する。

したがって、弥生時代には、花粉化石が検出されたイネ科、アブラナ科、キク科の草花が生育する草原環境が広がっていた可能性がある。

また、木本花粉から周辺地域の森林環境について考察を行うことも可能であるが、木本花粉の検出量が少なく、錯誤の可能性が高くなることから、ここでは行わなかった。

2) 上部 (弥生時代～中世)

No.1 地点試料 No.6、5 層準が No.2 地点試料 No.2、1 に対応するとすれば、この層準の堆積年代は弥生時代から中世ということになる。

下部に比べ堆積物粒子がやや粗く、堆積速度が速かった可能性もある。このため概査では、炭、プラント・オパールとともに含有量が少なかった。一方で花粉粒には紫外線タイプの劣化が認められ、土壤化作用の影響を受けたことも明らかである。

下部同様に、花粉化石が検出されたイネ科、アブラナ科、キク科の草花が生育する草原環境が広がっていた可能性がある。一方で、イネ科（40ミクロン以上）花粉、ソバ属花粉が検出され、イネ、ソバなどの「耕作」が行われていた可能性もある。

また、木本花粉から周辺地域の森林環境について考察を行うことも可能であるが、木本花粉の検出量が少なく、錯誤の可能性が高くなることから、ここでは行わなかった。

(2) II 帯 a 亜帯 (中世)

① 森林植生

木本花粉の検出量が多くはないものの 2 試料ともに同傾向を示すことから、信頼に足るデータと考えられる。

アカガシ亜属、シイノキ属などの照葉樹林要素が認められる一方で、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属、スギ属などの温帶針葉樹、コナラ亜属、クマシデ属ーアサダ属、クリ属などの二次林要素も認められる。したがって、周辺の山地高所には常緑広葉樹に温帶針葉樹を伴う中間温帶林（温帶針広混交林）が分布し、山地低所には落葉広葉樹を主体とするいわゆる「薪炭林、里山」が分布していたと考えられる。

② 近辺の植生

イネ科（40ミクロン以上）花粉が高出現率を示し、オモダカ属、カヤツリグサ科などのいわゆる「水田雜草」を伴うことから、No.1 地点近辺には水田が広がっていたと考えられる。またソバ属花粉もわずかに検出されることから、ソバが栽培されていた可能性も高い。さらに、アブラナ科花粉も高率を

示す。いわゆる「雑草」である可能性も否定できないが、ナタネなど有用作物を栽培していた可能性も否定できない。No.2 地点近辺で検出されている畝状の遺構などで、水田耕作と平行してソバなどの雑穀が栽培され、裏作としてナタネなどの栽培が行われた可能性がある。

(3) I 帯（近世以降？）

① 堆積年代

マツ属（複維管束亜属）が卓越し、他の種類はほとんど検出されていない。このような花粉組成の傾向は、例えば島根県東部では近世以降の特徴であり（大西ほか, 1990）、近世以降の植生を示している可能性がある。ただし、マツ属（複維管束亜属）の卓越は人為的な森林破壊とその後の二次林化、さらに「薪炭林、里山」としての保護によると考えられており、地域間での「差」が存在する。このため、データの乏しい本地域でマツ属（複維管束亜属）の卓越を持って、近世以降と即断するには至らない。今後のデーター蓄積を持って、改めて堆積年代を論議したい。

② 森林植生

前述の様にマツ属（複維管束亜属）花粉が卓越し、アカマツを主要要素とする「薪炭林、里山」が周辺の山地に広がっていたと考えられる。コナラ亜属花粉なども検出されることから、「薪炭林、里山」には、コナラ類、クマシデ類も混交していたと考えられる。一方でアカガシ亜属、シイノキ属—マテバシイ属花粉も検出されることから、局所的に照葉樹林が残存していた可能性がある。

③ 近辺の植生

II带 a 亜帯同様にイネ科（40ミクロン以上）花粉が高出現率を示し、オモダカ属、カヤツリグサ科などのいわゆる「水田雑草」を伴うことから、No.1 地点近辺には引き続き水田が広がっていたと考えられる。またソバ属花粉もわずかに検出されることから、ソバが栽培されていた可能性も高い。さらに、下位の試料No.2ではアブラナ科花粉が高率を示す。アブラナ科花粉は下位層準でも高率を示すことから、耕作に伴い下位から混入した可能性も否定できない。しかし、下位層準との境界には酸化鉄が沈着するなど、明らかに分かれることから耕作に伴う擾乱は考えにくい。したがって、ここでのアブラナ科花粉も本質的なものである可能性が高い。前帯同様にナタネなど有用作物を栽培していた可能性が指摘できる。水田耕作と平行してソバなどの雑穀が栽培され、裏作としてナタネなどの栽培が行われた可能性がある。

まとめ

SK02および対比試料のリン濃度分析結果から、SK02に動物が埋まっていた可能性はきわめて低いことが明らかになった。

花粉分析結果から以下の事柄が明らかになった。

- 1) 花粉分析結果から I、II 帯を設定した。出土遺物との関係から、II带 b 亜帯下部が弥生時代、上部が弥生時代から中世、II带 a 亜帯が中世、I 帯が中世以降の植生を反映していると考えられる。
- 2) II带 b 亜帯期後半に、遺跡周辺ではイネおよびソバの栽培が行われていた可能性が高い。
- 3) II带 a 亜帯期では、アブラナ（ナタネ）が栽培されていた可能性がある。
- 4) II带 a 亜帯期には、山地低所には「薪炭林、里山」が広がっており、I 帯期には周辺のほとんど

の山々が「薪炭林、里山」と化していたと考えられる。

5) II带b亜帶期では、山地高所には常緑広葉樹に温帯針葉樹を伴う中間温帯林（温帯針広混交林）
が分布していたと考えられる。 渡辺正巳（文化財調査コンサルタント（株））

表1 リン濃度測定結果

試料No.	P（リン）含有量（g/kg）
SK02	0.42
対比試料1	0.32
対比試料2	0.51

引用文献

- 大西郁夫・干場英樹・中谷紀子（1990）宍道湖湖底下完新統の花粉群. 財団法人米子市教育文化事業団地質学研究報告, 9, 117-127.
中村 純（1974）イネ科花粉について、とくにイネを中心として. 第四紀研究, 13, 187-197.
渡辺正巳（1995）花粉分析法. 考古資料分析法, 84, 85. ニュー・サイエンス社.

図表一覧

- 表1 リン濃度測定結果
図1 試料採取地点
図2 No.1 地点の花粉ダイアグラム
図3 No.2 地点の花粉ダイアグラム
図版1 花粉分析用プレパラート状況写真
図版2 検出花粉化石顕微鏡写真

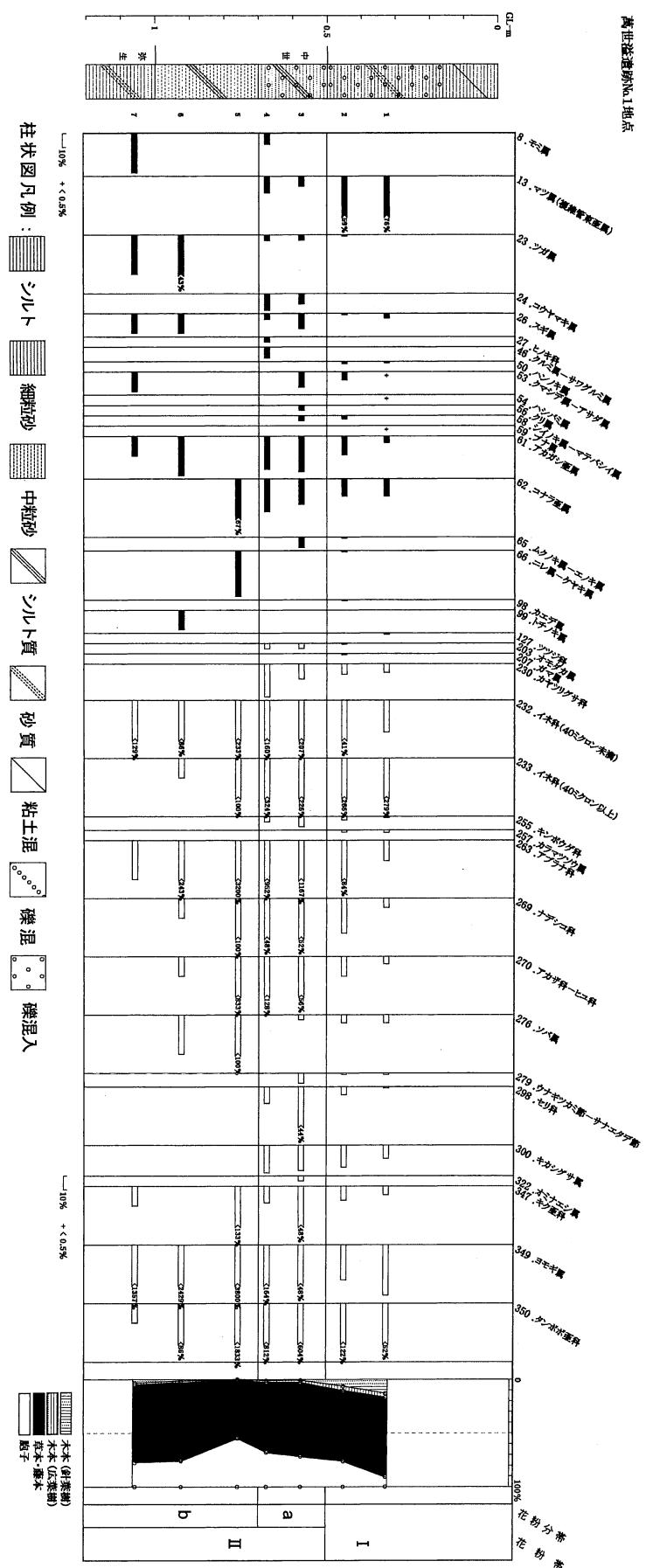


図2 No.1地点の花粉ダイアグラム

萬世遺跡No.2地点

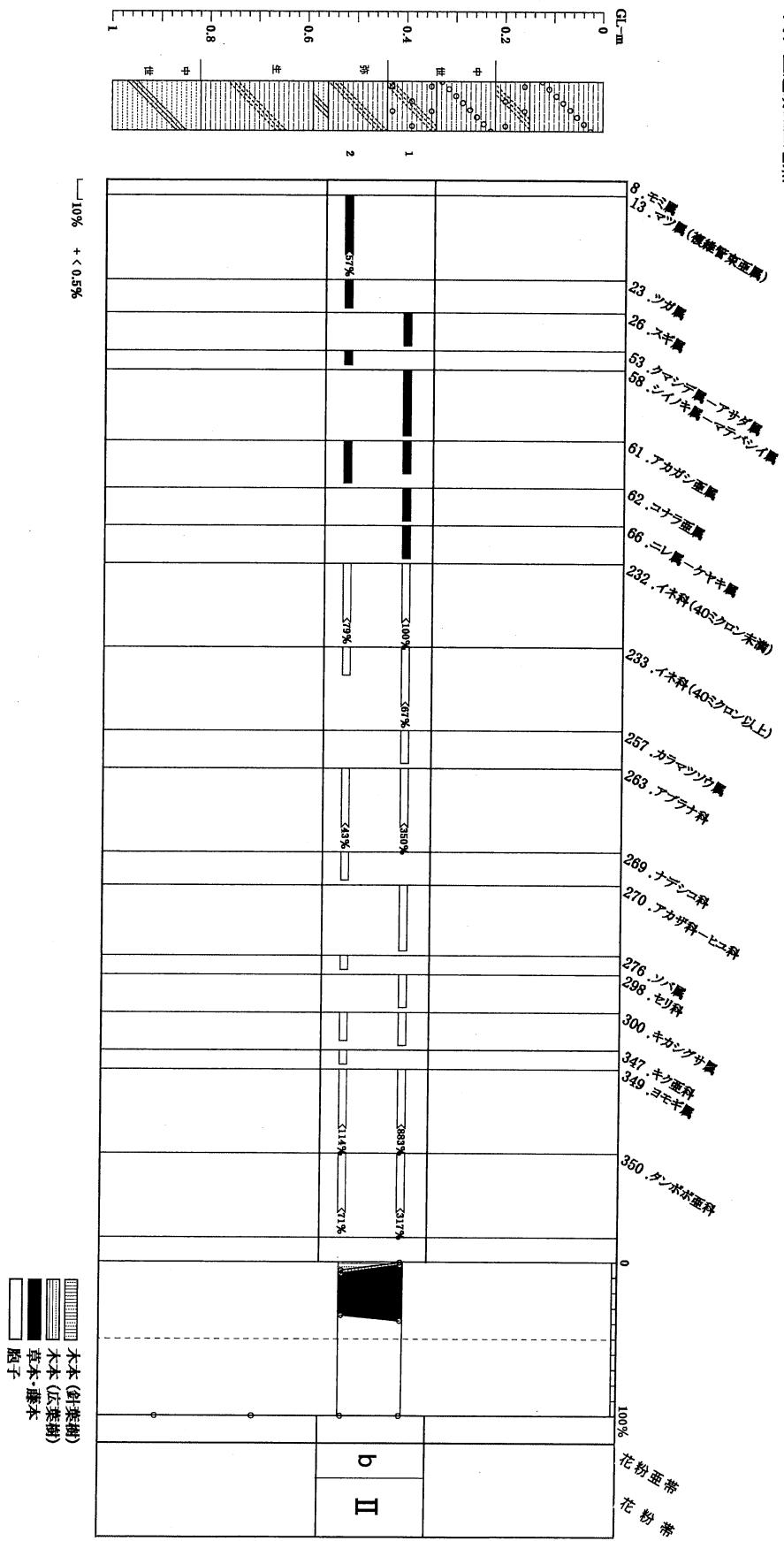
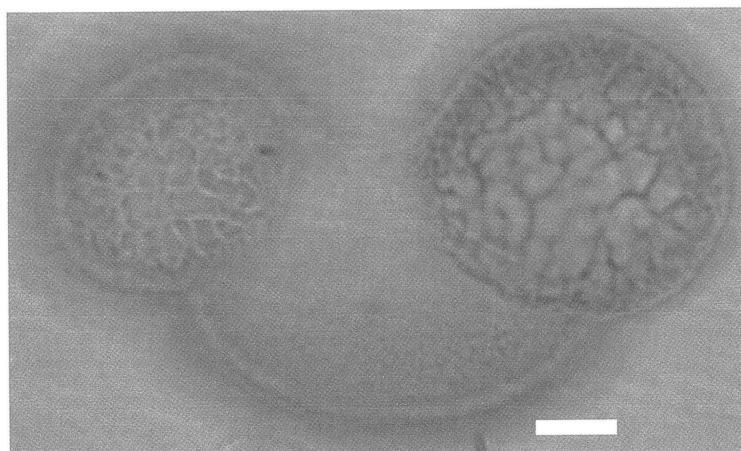
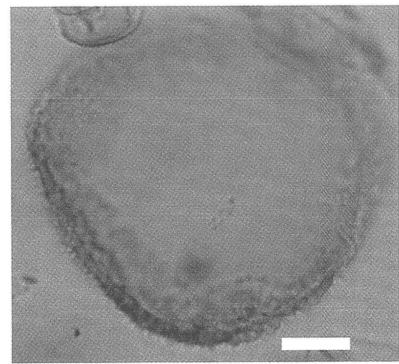


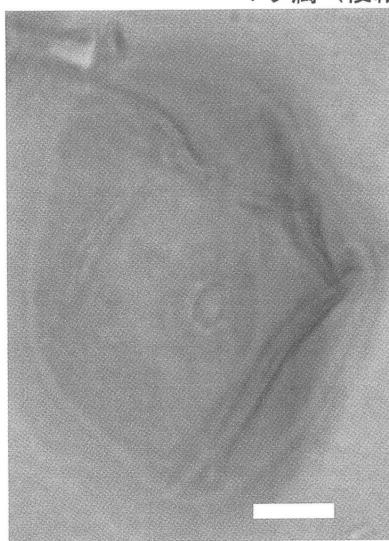
図3 No.2地点の花粉ダイアグラム



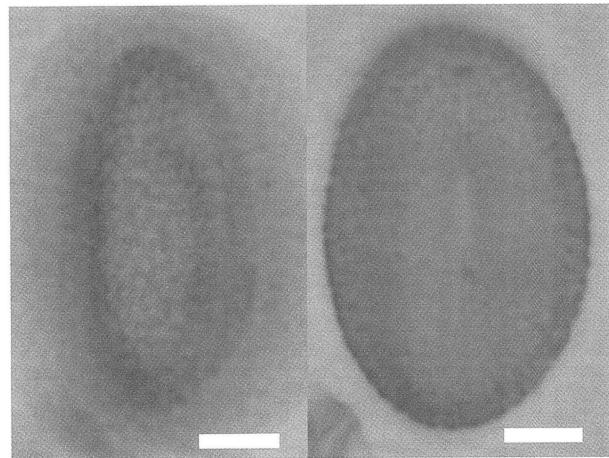
マツ属（複維管束亞属）



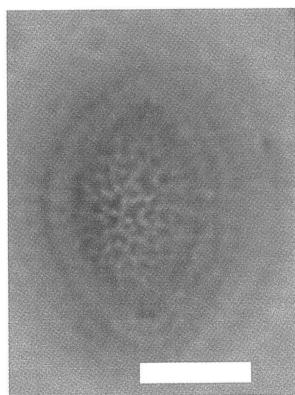
ツガ属



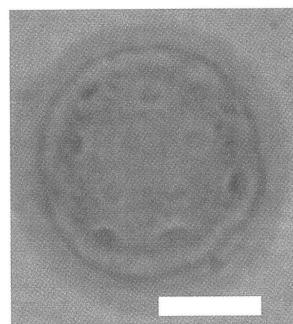
イネ科（40ミクロン以上）



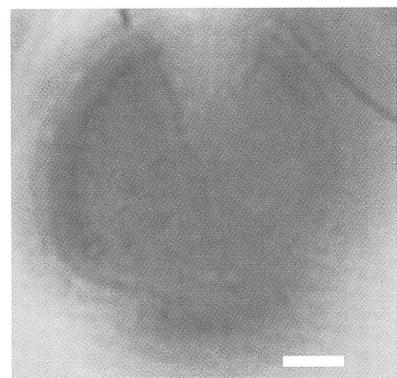
ソバ属



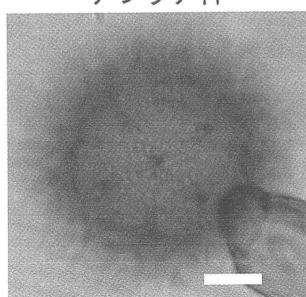
アブラナ科



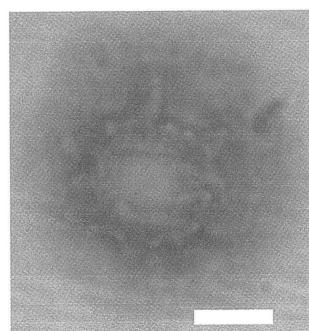
アカザ科—ヒュウ科



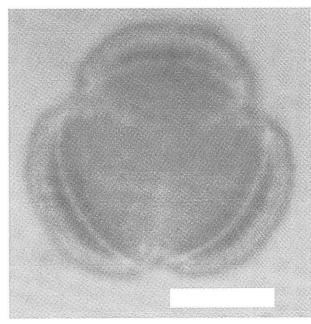
オミナエシ属



キク亜科



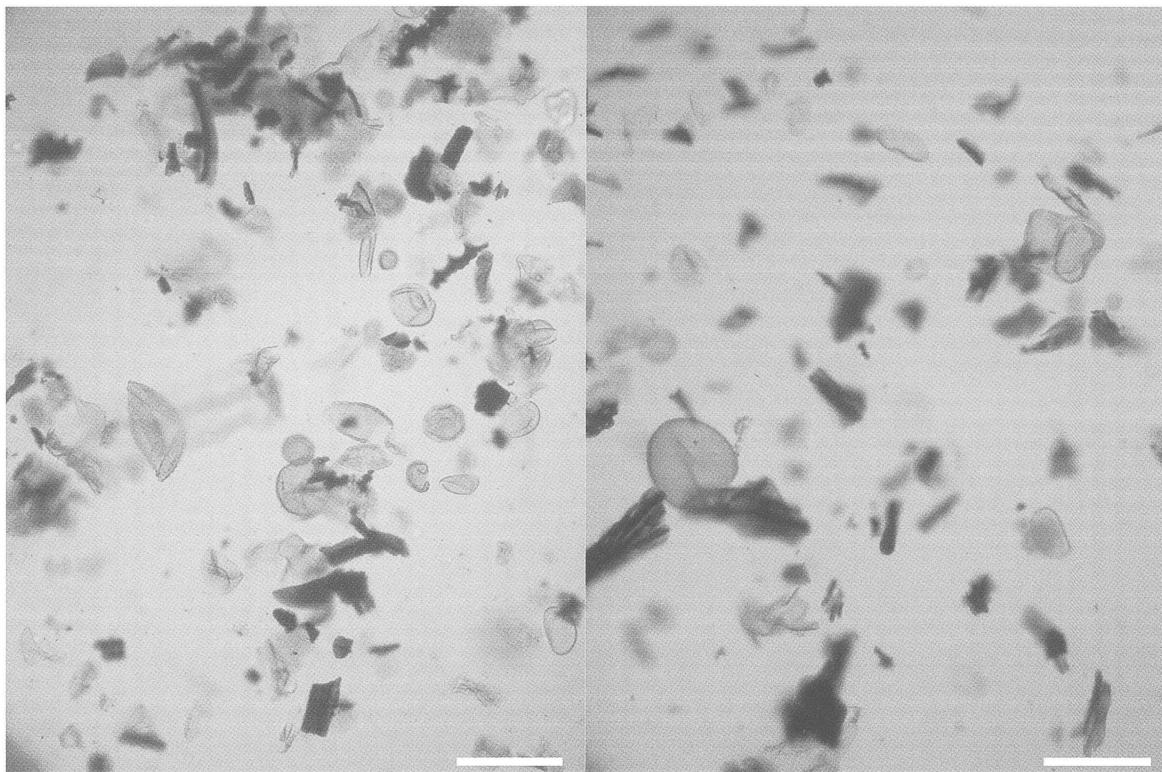
タンポポ亜科



ヨモギ属

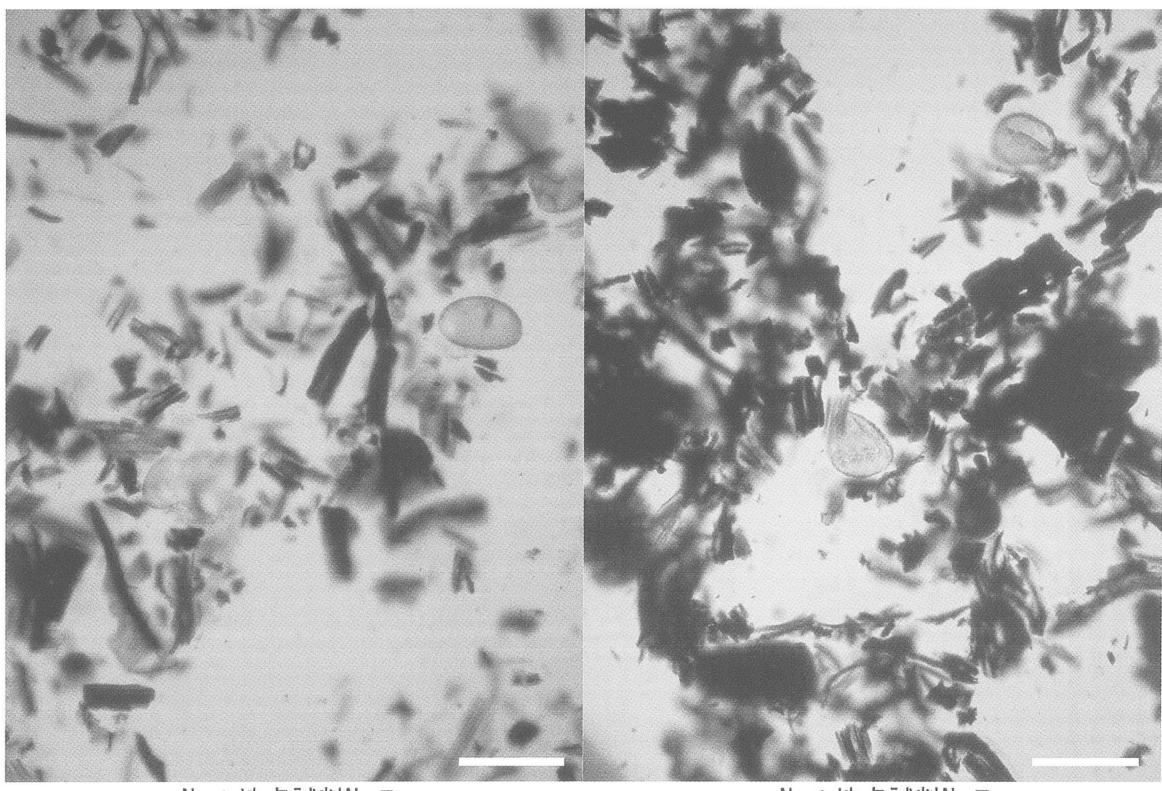
スケールバーは0.01mm

花粉分析プレパラート状況写真



No. 1 地点試料No. 2

No. 1 地点試料No. 4



No. 1 地点試料No. 5

No. 1 地点試料No. 7

スケールバーは0.1mm

第6章 小 結

萬世溢遺跡は、平成12年度の試掘調査で所在が確認されたものである。本調査は、開発に伴う緊急の調査であったため調査日数も限られ、また開発に影響しない下層に縄文後・晩期の包含層が確認されたが、開発に伴う発掘調査であったため、調査条件に制約があり、この層以下については発掘を見送った。したがって遺跡の全貌は明らかにすることはできなかった。そのことを最初に断った上で、以下気付いた点を記したい。

まず、本遺跡は、縄文・弥生・古墳・中世・近世の5つの文化遺物が確認された。しかし、後世によるところの水田と化された地点であったため、上位の地層については層序的に捉えることを基本とする考古学上からいうと、けして良好な遺跡であったとは言えない。また、津和野川の氾濫などで遺構等の原形をとどめないという状況であったが、最低限の痕跡だけは捉えることができたのではないかと思っている。

まずA調査区から見てみる。そのうち中世・近世遺物に関してであるが、これらは2層下位部から3層にかけて包含されるといった傾向がみられた。出土遺物の量が少ないため詳細な考古学的判断は困難であったが、本遺跡の近くに当時の街道があり、中世以降人々が多く居住した地域であったことや、ピット状遺構や配石遺構などが検出していることからも、人々が当地においてなんらかの生活していたものと推定された。

古墳時代の遺物としては、3層の黒褐色土層から須恵器が数点出土している。年代は6世紀後半～7世紀前半のものであるが、遺物量が少ないのでこの地層についての詳細なことは捉えることはできなかった。

弥生期の遺物は、凡そ3層黒褐色土層から5層淡黒褐色砂質土層にかけて包含され、ほとんどが中期に属するものであった。中には、山口県の宮ヶ久保遺跡から出土した中期後半の土器と同類のものが出土しているので、彼の地と何らかの交流があったものと思われる。しかし、同層から縄文土器や陶磁器なども出土し、遺構等も検出されていないことからも、正確なことは明らかに出来なかった。

縄文時代の遺物は、4層から6層にかけて多く出土した。これらの出土遺物の多くは後期後半から晩期の土器片が多く、打製石器の斧や石鏃も比較的多く出土している。調査区北側においては、3層から土器や石器が出土していたが、水田造成などの削平によって搬入したものであると捉えた。出土土器の中には西本式・元住吉山I式・三万田式の特徴をもつ土器も確認され、突帯文を施した晩期土器も多く出土した。九州地方の影響や交流があったものと推定した。しかし、遺構については確認できた配石を伴った土坑が1つだけで、下層付近は津和野川の氾濫によって、遺跡全体が搅乱されている状況であった。

B調査区においては、耕作土の下層が河床といった状況であり、遺物を含む包含層や遺構等は確認出来なかった。しかし、僅かではあるが縄文後期から晩期の土器が出土していることから、当時の人々が生活していたことは確かである。

縄文時代と弥生時代について考えると、縄文時代は晩期の土器が出土しているが、弥生土器につい

ては、ごく少量の前期土器以外はほとんど前期後半から中期以降しか出土しなかった。このことからすると本遺跡では縄文時代から弥生時代に連続的に移行した形跡は認められず、縄文人が居なくなつた後に、弥生人が移り住んだのではないかと想像した。また今回の調査した地点は、当時の生活圏の端部にあたる地点と思われ、遺跡の中心は調査対象地ではなかった西側の水田にあるのではないかと思われる。今回調査した地区の周辺を、今後調査することが出来れば遺跡の全貌が明らかになるのではないかと思われた。

参考文献

沖本常吉1964『日原町史 上巻』日原町教育委員会

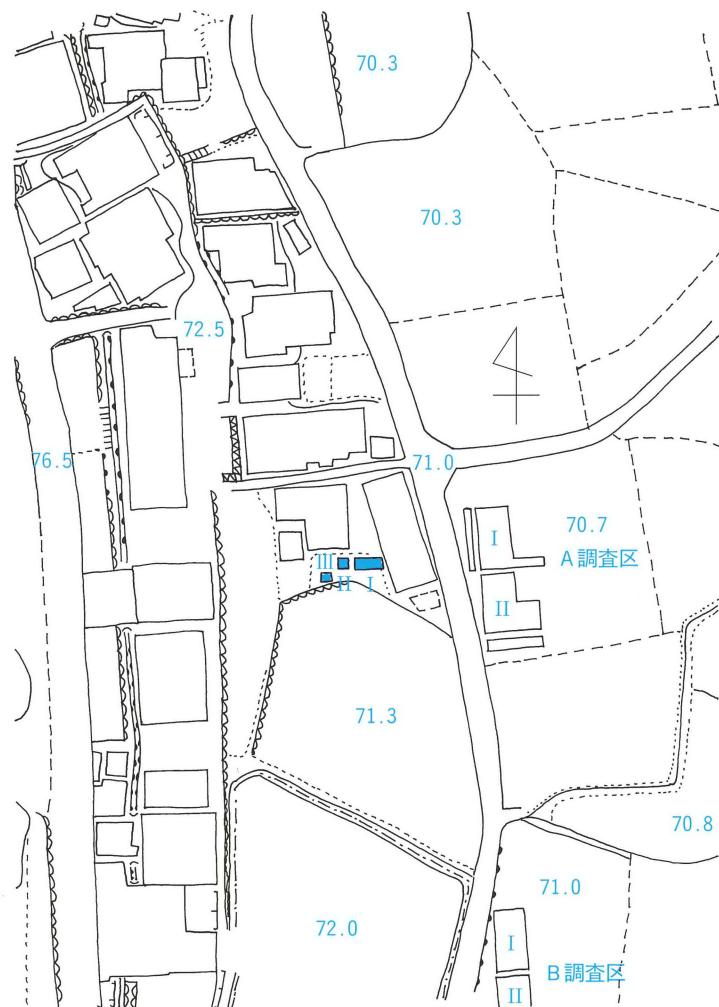
山口県埋蔵文化財センター『宮ヶ久保遺跡』阿東町教育委員会

第7章 平成14年度 確認調査

平成14年10月1日から遺跡の範囲を確認する調査として、本遺跡のA調査区の西側に位置する地点を地権者許可をいただき、調査することにした。調査地点は出土遺物が多かったA-II調査区から西側へ約15m離れた地点に設けた。調査区は3ヶ所設け、東側から西側にI区として2m×4m、II・III区は2m×2mの区画を調査した（第22図 図版14）。

まずI区から見てみると、1層耕作土、2層灰褐色粘質土、3層茶褐色砂質土、4層黄褐色砂土（河床）の層序であった（第23図 図版14-2）。3層からは約20点の縄文土器などが出土したが、層厚が僅か5cm程度で遺構等は確認できなかった。II・III区は、1層耕作土、2層橙褐色粘質土、3層茶褐色土、4層明灰褐色砂土であった。III区からの出土遺物は無かったが、II区からは数点の縄文土器と石器が出土した。出土遺物については、特徴的なものを中心に実測した（第24図・図版15-4・第6表）。

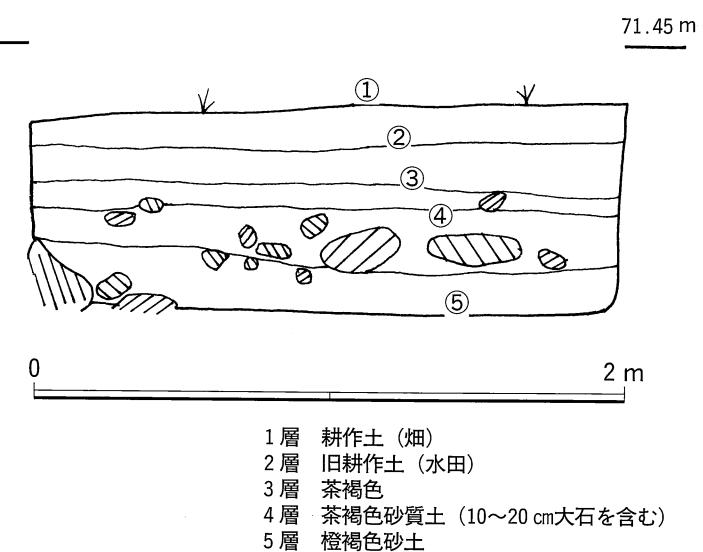
以下、年代の古い順に詳細に記述していくことにする。1は縄文後期の浅鉢の口縁部片で、外面部には縄文施文の後、沈線が施されている。2は縄文後期～晩期の浅鉢の体部片で、擬似縄文・沈線が施されている。3は縄文の浅鉢で、ゆるく「く」字状に屈曲する体部片である。4は口縁端部に擬似縄文を多方向に施し、内側に一条の沈線がある。5は縄文の鉢と思われ、屈曲部には擬似縄文が施されている。6は内湾する縄文土器の体部片で、擬似縄文と巻貝条痕が確認できる。7～10は、縄文晩期前半の深鉢の口縁部片である。そのうち8・10にはスヌが付着していた。11は土師器。高台付きの底部片で、粗い回転ナデが確認できる。時期は中世期のものと思われた。13は打製石器で土堀具と思われ、基部が欠けており刃部がやや摩耗している。原岩は珪質頁岩又は細粒砂岩と思われる。



第22図 調査区配置図（平成14年度）

以上のように、今回調査した地点においても13年度に調査した本調査区と同様な遺跡が確認できた。しかし今回の調査区は狭い範囲のものであったため、遺跡の広がりが僅かに確認ができた程度である。

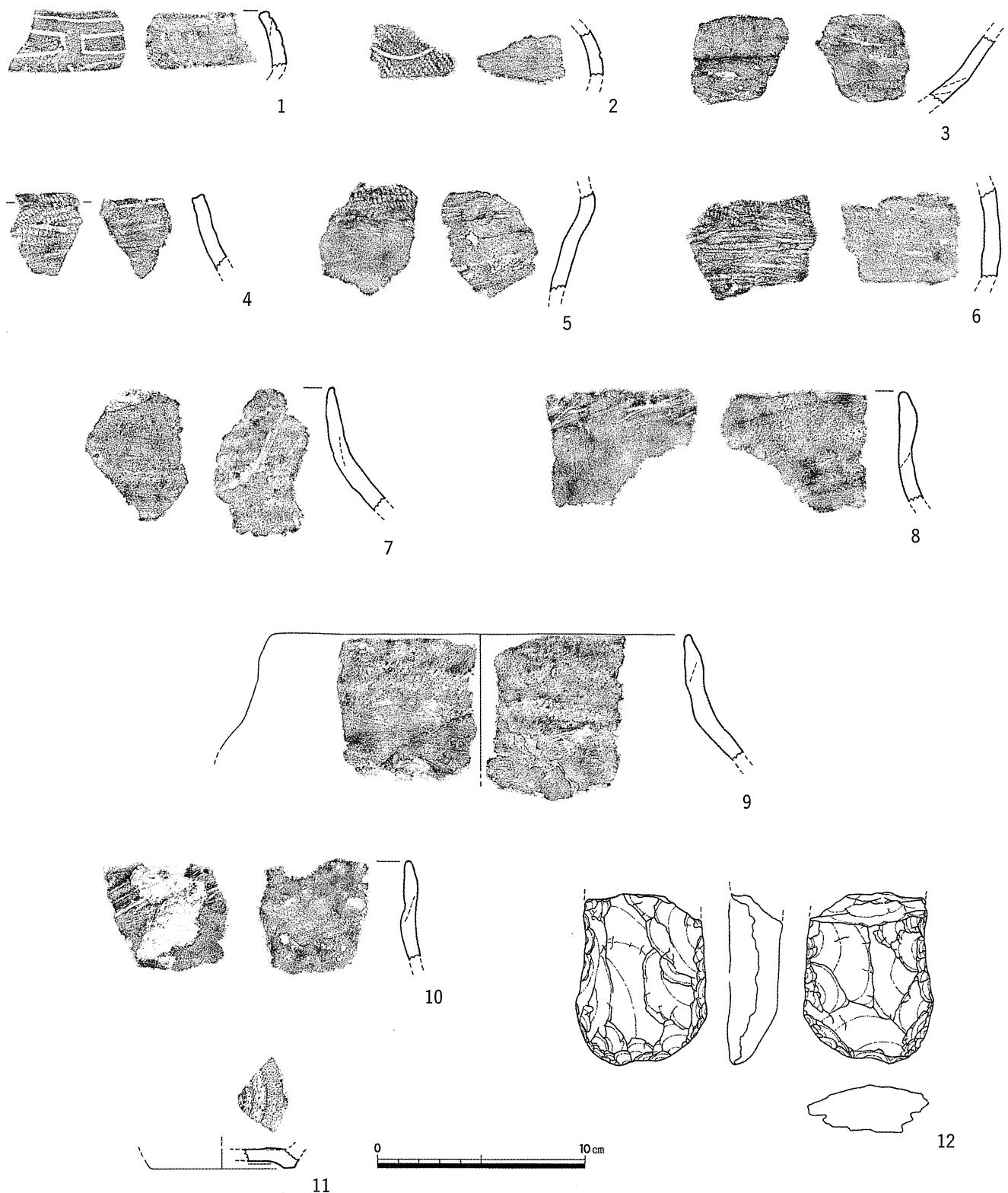
しかし、本遺跡は前年度に調査した範囲に止まらず、広範囲に広がる可能性が見えてきた。遺跡の全貌が明らかになるのは今後の調査に期待するしかないものである。



第23図 I 調査区土層図

第6表 出土遺物観察表(平成14年度)

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径/底径/器高		形態・手法の特徴	色調	胎土・焼成	備考
1	I 区 3層	縄文 浅鉢			口縁部内湾気味、端部斜目に平坦面 (外)沈線、擬似縄文、(内)ミガキ	外内：浅黄橙色	(胎)密(焼)良好	口縁～体部の片
2	I 区 3層下	縄文 浅鉢			体部内湾 (外)沈線、擬似縄文、(内)ミガキ	外内：にぶい黄橙色	(胎)1mm以下の砂粒を含む、金雲母(焼)良好	体部の片
3	I 区 3層	縄文 浅鉢			体部ゆるく「く」字状に屈曲 (外・内)ミガキのちナデ	外内：にぶい黄橙色	(胎)1mm以下の砂粒を含む、金雲母(焼)良好	体部の片 スス付着
4	I 区 4層	縄文 深鉢			口縁部内斜し平坦面を持つ端部、(外)擬似縄文(L R方向) ナデ、(内)沈線(1条)、ミガキのちナデ	外内：にぶい黄橙色	(胎)1mm以下の砂粒を含む、金雲母(焼)良好	口縁～体上部片
5	I 区 4層	縄文 深鉢			体部外傾し、内湾曲しながら口縁部へ(外)擬似縄文、ミガキのちナデ、(内)ナデ、指圧痕	外内：にぶい黄橙色	(胎)1mm以下の砂粒を含む、金雲母(焼)良好	体部の片
6	I 区 4層	縄文 深鉢			体部内湾気味 (外)擬似縄文、条痕(巻貝)、(内)ナデ	外内：にぶい黄橙色	(胎)2mm以下の砂粒を含む、金雲母(焼)良好	体部の片
7	I 区 4層	縄文 深鉢			口縁部外反する(外)ナデのち指ナデ、指圧痕 (内)ナデのち指ナデ	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄褐色	(胎)3mm以下の砂粒を含む(焼)良好	口縁～体上部片
8	I 区 3層下	縄文 深鉢			口縁部外反しながら立ち上がり、口縁部付近で内湾気味 (外)条痕、指ナデのち(内)指ナデのち指圧痕	外内：にぶい黄橙色	(胎)3mm以下の砂粒を含む、金雲母(焼)良好	口縁～体部の片 外内：スス付着
9	I 区 4層	縄文 深鉢	20.0		口縁部内傾 (外・内)ナデのち指圧痕	外内：にぶい黄橙色	(胎)3mm以下の砂粒を含む(焼)良好	口縁～体上部片
10	I 区 3層下	縄文 深鉢			直立的に立ち上がる(外)斜行する条痕、ナデ (内)ナデのち指ナデ	外内：にぶい黄橙色	(胎)4mm以下の砂粒を含む(焼)良好	口縁～体上部片 外：スス付着
11	I 区 3層下	土師器	7.0		口縁部高台部は幅広く低目(外)ナデ、(内)粗い回転ナデ	外内：にぶい橙色	(胎)1mm以下の砂粒を含む(焼)良好	底部片
挿図番号	出土地点	器種	法量(cm) 長さ 幅 厚さ		形態・手法の特徴	備考		
12	II 区 3層下	打製石器 (土掘具)	8.2	6.2	2.6	刃部やや磨耗している 基部欠	ホルンフェルス	源岩は珪質頁岩又は細粒砂岩



第24図 出土遺物実測図（平成14年度）